

求道

十 月 號

思想問題論議と信仰的解決

假の願の意義——『報土化土論』

人生最終の歸結

眞佛顯現の本源——『眞佛土卷講話』

病床感謝の御たより

第拾六卷

第貳號

講話

思想問題論議と信仰的解決……………(一)

假の願の意義——報土化土論……………(六)

- 一 眞の願(報土)と假の願(化土)
- 二 方性法身と方便法身
- 三 法然上人(念佛)と親鸞聖人(信心)
- 四 誓願不思議、名號不思議
- 五 三願導入
- 六 假の願の意義

●●●●●
 毎日曜午前九時
 毎土曜午後七時
 毎月十五日午前九時慶信會
 毎月二十八日午後七時鸞聖會

人生最終の歸結……………(一八)

求道會館

(本郷區森川町一番地)

- 一 四姓の終歸萬國の極宗
- 二 講和會議と日本
- 三 人類最後の平和とそれに至る原則
- 四 佛教の特色と西洋の宗教
- 五 『歎異抄』の十二章
- 六 親鸞聖人の兩面
- 七 我が身自身の問題なり
- 八 『佛説まことなりけり』と知られ候

近角 常觀……………(四〇)

●●●●●
 毎土曜午後二時

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

眞佛顯現の本源——眞佛土卷講話——近角 常觀……………(四〇)

- 一 『眞佛土卷』
- 二 光明無量壽命無量
- 三 佛は一佛なり
- 四 不可思議光如來
- 五 如何なるにも呆れぬものがお眞實
- 六 無量光明土

●●●●●
 毎月二十七日午後七時

第三求道會

(日本橋彌生町説教所)

病床感謝の御たより……………(五〇)

思想問題論議
と
信仰的解決

○思想問題論議も随分久しいものである、然しながら、一向明瞭なる解決もつかぬ様である。内務省の民力涵養もあまり捗々しき結果を聞かない。宗教家の奮起を望むといふ聲も比較的自覺ある叫なれども、未だ徹底せる考案を得るに至らない。一言にして盡せば前途悠遠の歎を免れなす。

○尙進みて考ふれば抑々思想問題なるもの、本體は何であるか。新らしき思想家は自由の聲解放の叫勇ましく、新來の思想に對して送迎忙はしく、直譯的に斬新なるものを逐ふのみにして、未だ確信ある態度を認むることが出来ぬ。労働問題の如きも、徒らに民衆を教唆するのみにして、眞に民衆の幸福を考ふるか、寧ろ

民衆を踐臺にして、自己の名を爲さんが爲か、其至誠を疑はざるを得ざるものもある。

○又反對に民力涵養を叫び、思想統一を主張する側を考ふるに、如何なる方法を以て其目的を達せんとするか、言論の拘束、法律の制裁によりて徒に其外形を極枯せんとするが如きは害ありて益なきのみならず、其民力涵養の講演の如きは、毫も思想問題に觸れざるのみならず、畢竟律法主義の道德及主張を強制的に、若くは、教權的に説法するに止り、甚しきに至りては、職業的に藝人者流と異なることなきに至りては滑稽極れりといふべし。

○畢竟するに思想の自由を叫ぶ人も、統一を唱ふる人

も、之を他に宣傳唱道する前に、少し自己を省察するの要はないか。今日の解放自由を唱ふるの人も、從來の律法思想に満足することの出来ぬ點は如何にも尤であるが、さりとて徒に自由解放を叫ぶのみで、果して確信ある立場を得られるか。權勢團に對し、富豪團に對して反抗的態度を取るは無理からぬ自然の形勢なるべけれど、徒に相對的氣分を以て騎虎の勢を以て進むが如きは、決して確信ある行動といふことは出来ぬ。未だ自己も満足せざる思想を以て、徒に他を教唆せんとするが如きに至りては、不誠意も甚しといふべきである。

○全體思想問題なるものは今日に於ては世界の大問題である。論より證據、現今歐洲に於て實際問題の經過を以て實證すべきである。獨逸の帝國主義、軍閥主義、官僚主義、統一主義に對する戰爭として、民本主義、自由主義を正面に振りかざして奮起したる米國の昨今の有様は何事であるか。先方より見れば日本を第二の

態度を以て彼等に對したものである。而して彼等は過激思想を以て一點の涙なき殘虐の刃を以て向つたものである。故に若し思想問題を以て言ふならば、武士道と過激思想との戰と言はねばならぬ。此の點に於いては、或は從來花々しき名譽の戰死と稱せらるゝものよりも、より以上に精神的に貴きものと言はねばならぬ。然るに動もすれば露國は勿論列國よりも、日本軍閥の一部が復仇されたかの如く考へられて居るかも知れぬ。世上では日本が宣傳せぬから世界に分からぬのであるかの如く噂するが、事實の宣傳よりも日本本來の思想が宣傳されぬからである。否、日本自身に於いても、武士道が軍閥の犠牲になつて居るのではなからうか。

○思想問題なるものは決して單純なものではない、何事でも甚深の意義あることを認めねばならぬ。然れども事實は常に之を實證するものである、近時尼港遭難者に對する同情義捐金を見るに、恐くは是程至誠より

獨逸の如く考へて居るのであらうが、米國が排日を旗印として民衆に煽ひ、財閥化、軍國化するのみならず、朝鮮に支那に西比利亞に立派なる統一主義を實現して、建國の國是を傷けることを省ることが出来ない有様である。

○思想問題より觀察して解放の結果、最も反對なる放縱無秩序の極に陥りたるものが露國である。レニン政府に對する各國の態度なるものが、亦頗る興味ある思想問題の推移である。兎に角、露國は思想問題の犠牲者である。專制帝國より解放されたる結果が、勞農政府の虐政である、露國教會の破壊が、過激思想の支配である、其極が世界人道の敵たるバルチザンの出現である。私は此意味に於て尼港に於ける我同胞は、世界人道の犠牲者として、深甚の意義あることを認めねばならぬ。無論彼バルチザンに於ては、國家的觀念はないのであらう、我同胞と同じく、露國民をも殘殺したてあらう、併、我同胞は我國本來の武士道、仁道正義の

集りたる零碎なる義金はあるまい。而して不思議にも富豪より義捐せぬも、是亦一の不思議と言はねばならぬ。之を先年米騒動の時、富豪が先を争ふて巨額の金を出したるに比較して、皮肉なる對照と言はねばならぬ。恐くは是れ深き原因のあるのではない、富豪なるものは他より切派つまりたる勧誘でもなき限りは、自發的に奮發することのないのかも知れぬ、併あまり殉難者に對して冷淡と言はねばならぬ。勞働問題といふ様な人氣ある題目には、動もすれば帝國主義者や軍閥者流までが罷出でんとするのに、此思想問題の犠牲者に對して理解が出来ぬと見える。特に近時排日問題の盛なる時、恰も日曜學校大會の爲に、富豪連が心にもなき巨額の寄附金を申付けらるゝのみならず、周到なる準備をして其居室を提供して、外賓の宿泊に充てねばならぬといふは何たる因縁ぞや。基督教の名の下に青年會とか、日曜學校とか、或意味に於て米國思想の宣傳とも見られぬとも言へぬ。夫に對してかくまでも

軟弱なる態度に出ねばならぬものか、かゝる方法を以て排日思想を緩和せんと欲するものあらば、自主的外交の消沈も亦甚しと謂ふべきである。

○要するに自由解放を叫ぶも、浮足調子で眞の自覺ある聲ではない、軍閥も財閥も相變らずの大平である、唯世上の形勢に推されて不眞面目に人氣に乗せんとする行動のみである。此の如く何時までたつても眞實の光明ある人生を實現することの出来ぬのは、畢竟その思想問題の根柢を常に外界にのみ著眼し、經營問題、政略問題とのみ考へて、眞個に自家内面の實驗の叫として顯はれぬからである。我等は内心に於てあらゆる律法を以て自分自身を制せんとして、遂に制すべからざる自我のために泣きたる經驗を有するものである。自分の律法ですら自己を制御することが出来ぬのである、況んや人爲的の權力勢力を以て人を律せんとする如きは、駄目なることは言ふを待たぬのである。いつまでも天下泰平で律法を以て人心を統一し、財力金力

を以て他人を左右することが出来る様に思ふが根本の誤である。近時思想問題は經濟學者の本職の如く考へられてある、蓋し是れ哲學者流の空想が、あまりに人生生活にかけはなれた爲に、生活と近接せる經濟學者に株をとられた様になつたのであるが、所謂人は必しもパンのみを以て生くるのではない、眞に生きんとするときは、眞の思想を以て生命とせねばならぬ。此意味に於ては人間は眞の信仰を以て生きねばならぬのである。

○我等は既にあらゆる律法を以て生くる事が出来ぬとすれば、必然の結果として其律法を破壊し、從來の形式より解放されて、自ら生きんことを望むは亦止むを得ざる勢である。併徒に舊律法を破壊し、舊形式より解放されたるばかりで安心が出来るか、若しや自分の欲するが儘の自然、自由、我儘の自由を以て満足が出来れば、吾人は決して煩悶するに當らない。我等は自然主義の如き自由放縱を以て甘んずることが

出来るならば、之を以て生命ある人生とは名けられぬ。

世上滔々たる新思想家や新運動家が、憐れ、はかなき沈溺荒怠氣分に流れたり、反逆反抗の極に陥りて、遂に自家の立場を失ふに至る如きは、未だ眞の人生の光明に接せざるがためである。併し此の如き敗殘に陥りたるものは、寧ろ同情に價するかも知れぬが、口に新思想を叫びながら、内面は權閥財閥に近かんとするもの如きは、唾棄すべき極である。而して露國米國の如き、自ら新らたなる財や專制力の虐政を實現するに至りては、思想問題の循環も亦怪しむべきである。

○此の如き放縱の自然に甘んずるあたはず、又律法の生活に安んずること出来ぬとすれば、此に我等は如何んともすべからざる境界に陥るものである。自分の律法に安んずるあたはず、自分の自然に甘んずることあたはねば、此の如く我等の進退如何ともすべからざることを悲憫して飽まで見捨てざる無碍の光明の出現が

あらねばならぬ、是即ち眞の如來である、無限の光明である、無限の壽命である、是が本願他力眞宗である。行くも死せん、止るも死せん、還るも亦死せんといふもの、實に近時思想問題人生問題の實際を形容し得て餘蘊なき言と言はねばならぬ。而して此苦境を憐みて哀感攝受したまふ大慈悲が如來招喚の聲である。我等は此慈悲に生きかへるのである、是こそ眞の佛國に生るゝものである。親鸞聖人が一念の信に於て即時に往生を得ると言はれたのが是である。かくしてこそ茲に眞の如來の生命より来る自然が現はれる、亦道徳も生ずる。此に至りて眞の無爲自然の郷に逍遙して、而も森嚴なる秩序ある人生々活を實現することが出来るのである。かくてこそ思想問題解決の鍵鑰を握り、やがては世界の渾沌たる生活問題、勞働問題、國際問題をも解決することを得ることは瞭々たるものである。

(歎異鈔十六章參照)

假の願の意義

『報土化土論』

近角常觀

六

一 眞の願(報土)と假の願(化土)

親鸞聖人の『教行信證』眞佛土卷の結文に

夫れ報を按ずれば、如來の願海に由て、果成の土を酬報したまへり。故に報と曰ふなり。然るに願海に就て眞有り、假有り。是を以て復佛土に就て眞有り、假有り。選擇本願の正因に由て、眞佛土を成就せり。

の文がある。意味は報を案ずれば、我々苦惱の衆生を哀はれみて、その者を何處までも見捨て無いのが佛の御眞實なれば、其の苦しきを、仕て見やうなきを何處迄も我能く救はんの佛の本願の願ひから、その願ひを満さしめずには措かぬの誓ひが起り、その誓ひから酬報い現はれて來た處の佛土であり、佛身である。

佛願の親心である。我々汗かきの亂暴者には、買うた華奢なのでは間に合はぬから、其の者に親が手織りを與へたとあるが、本願の御趣意である。即ち佛は我々の戒行修善ではゆき難きを見て、其の者に喰べられる南無阿彌陀佛の粥、手織の丈夫なのを下さらうとあるが御眞意である。爾るに茲に『そんな粥、手織りではイヤである、もつと美麗なのを著度い。南無阿彌陀佛の愚夫愚婦の稱えるのでは面白く無い、もつと座禪のいかめしいので遣り度い』といふ、今日の青年の如きが現はれて來た。そこで然ういふのは『そんなのでは可かぬ、是非この手織りを著なくては』と言つた處が、根が綺麗なのを著度いが性分の子供であるから、『爾らばよし』、汝に言うて聞かさん、汝は華美なのが善いのだと思ふも、華美なのが善いので無い、親が與へる手織りを著るがよいのである。手織りが本統は汝に似合ふ、この方を著るが本統である』と。——それは少しも善い物著度いの修養の立場に居る時は、『他の物より、この方を著るが善いのだ』と言はるれば、『それなら著ませうか』になり易いのである。併しその著るは、それ著るのが善いのだから著るのであつて、親が著させ

故に佛土は斯く遣る瀬無く哀はれむ大悲の願海から酬報し來つた果成の土である、故に報土といふと、斯ういふ意味である。

然るに此の度びこの文を拜讀して私自身に極めてハツキリした處があるから、理屈に涉るも申して見やうならば、

從來より他方の教義を専門に研究する者にとり、茲に一つの困つた問題があつた。夫れは『然るに願海に就て眞有り、假有り。是を以て復佛土に就て眞有り、假有り』——斯く佛願から眞實と假とが現はれて來るといふ、茲から起つて來る處の疑義である。

先づ筋より明にして行けば、私が常に用ふる處の喩へを以て申せば、我々如何なる食物も喰べられぬ病氣の子供には、親が骨折りの粥を喰べさせてとあるが

やうとある親の眞意が徹して著るので無い。それはこの手織りとある親の眞實の有難さが分つて、『難有い』とその親の手織りを頂いて著たのであれば本統であるも、それではまだ親が骨折りの親心の程はちつとも分つて居らぬ。皆様の中に近角のいふ可哀相の方は分らぬも、念佛を稱え佛を拜むは悪くは有るまいと、懸命に稱えて居る人はそれである。それでは何程眞面目にやつても、まだ眞の親心が届いたもので無いから、之が假である。即ち十八願の信心一つが佛の眞實の思召であるも、中に自力修養の根性の失せぬ人は、念佛稱えながらも念佛の親心が有難くて稱えるので無く、『稱えるのが善いのだ』で稱えるは假である。けれども然ういふのはそれで遣らせて眞實に導くが十九、二十の假の願である。處が『選擇本願の正因に由て眞佛土を成就せり』で、佛は其の汗かき、病人にこの手織り、粥の南無阿彌陀佛を届けて其の者を眞實の慈悲の淨土に救はんと、その思召し一つから作り上げて下された眞佛土の恵みである。茲に於てか眞宗にては眞實と假とを嚴密に區分して、眞佛土は報土、假の方は化土と、そこで『正信偈』にも

七

報化二土を正しく辨立せり。
といふてあつて、斯く報化二土を確り區別し來る處が眞宗の肝腎となつてゐるのである。

二 方性法身と方便法身

爾るに今斯く『願海に就て眞有り、假有り、是を以て復佛土に就て眞有り、假有り、』——之て見ると眞佛土が報土であることは分るも、假の方の化土も矢張り願海から酬報し來つた報土であるわけになつて、之には昔の宗學者も大分行き詰つた。『和讃』には

報土の信者はおほからず、化土の行者はかずおほし。とあつて、明に眞佛土が報土である。爾るに之になると化土も願海の部分になつて、すると報土の報土と報土の化土と、報土に二つあるやうな具合に、甚だ變なことになる、この問題なのである。

これは私以前より氣がついて居つたのであつたが——氣がついたもとは『歎異抄』の十八章に

まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからずさふらふ。かの安養淨土の教主の御身量をとかれてさふらふも、それは方便法身のかたちなり。

なのである。猶ほ言へば『眞佛土卷』も一つ後の處の御文には

既に以て眞假皆な是れ大悲の願海に酬報せり。故に知ぬ、報佛土なりといふことを。

之て見ると彌々化土とて報土であるわけになつて、報化二土が益々解り難いことになつて來るのである。之は態と斯う疑問を立て、見て言ふのである。

之は先きの粥、手織りの譬で言ひ換へれば、親の眞の思召が分つて『難有い』と親のお粥を頂いたのが眞の親心が通つたものであることは言ふ迄も無けれども、今の善い物を喰べたがる子供が、親より『この粥を喰べる方が善いのである、之れ喰べる方が偉いのだから喰べよ』と言はれ喰べたのも、矢張り親心で喰べたので無いか。すると矢張りこれ親心でないか、共にこれ報土で無いか。と斯ういふ問題になるのである。

そこで先づ御身量の問題から解いて行けば、今の學者は方便報身といふことに考えたのであるけれども、今いふ如く報身に眞實と方便とを分けるが無いことである。報身といへば眞實の佛と、古から決つてあるのである。爾らば御身量とは何かといふに、之は我々が

『御經』に安養淨土の教主の御身量が説かれてあるも、それは一如の證の境界から光を放ちて現はれ給ひた方便法身の形のことであるといふのである。處が前に或る學者があつて、茲を讀んでも分らぬ、方便法身の佛に御身量がある筈が無いと讀んで仕まつた。爾るに御身量が説かれてあると書いてあるのは、『化身土卷』の初に

謹て化身土を顯はさば、佛といふは無量壽經觀經の說の如し、眞身觀の佛是なり。

この『觀經』眞身觀の佛であるとする、明に『佛眼は四大海水の如く』といふやうな具合に身量が説いてある。『御身量は之だ』と取つて仕まつた。處が『觀經』の佛は明に化佛であつて方便法身の佛で無い。爾るに一本に方便法身が方便報身に書いてあるのがある。『よし。之は化佛に方便報身の名を附けることがあるのだ』と、終に化佛を報身に持つて行つて仕まつた學者があつたのであつた。これは専門に研究する者から見ると著しき問題である。何となれば報身といへば眞佛に決つてあるのである。爾るにそれを眞實と方便とに讀み分けて、終に報身を化佛に持つて行つて仕まつた説

考えられる眼、鼻、眉の形のことと無い『彼の安養淨土の教主の御身量』は『眞佛土卷』の初に、光明無量、壽命無量と言はれてある、あれが御身量なのである。我々は大きさが決まらねば一寸量とは難く居るも、斯く無量壽、無量光が眞實の如來のお姿なりと言はれてあるが、あれが御身量が説かれてあるのである。故に之は化佛のことと無くして、眞實の慈悲の佛のことを言はれたのである。それは恰も無生の生とか、無量の量とかいふ具合に、無量の量を現はして廣大の恵み知らせて下さる光明無量壽命無量の量である。故に『それは方便法身の形』であるが、併しその形の起つて來る法性法身一如の證の境界の方は量を離れてある。そうして我々はそれに往生させて貰ふの故、往生した我々の方は量を離れてある。故に『なにをもてか大小をさだむべきや』である。それはその境界から再び現はれて來る還相廻向の上からは方便法身といふことも出來やうかなれども、我々の參らせて貰ふ一如の境界の方は法性法身にして、方便法身で無い。その境界から救ひの爲に全面に光を放ちて、光明無量、壽命無量の覺體を現はして下されたが、方便法

身の眞の慈悲の佛となるのである。故に今の學者の方便報身の方は明に間違ひである。これでこの方は解決さるゝのである。

三 法然上人(念佛)と親鸞

聖人(信心)

然らば『願海に就て眞有り、假有り』——この方はちとをかしいのである。それは從來眞宗の者は、十九二十の願の化佛化土などは、信仰不徹底の結果ぐらゐにしか考えて居らぬ。爾らば然ういふ不徹底の信仰なり淨土を、佛が餘地を興へて作つて置かれたといふがをかしいのである。從來眞宗の者は、化土は西山、鎮西で、露骨に言へば自力念佛の者を入れる監獄をこしらえられた位にしか考えて居らぬ。國家が監獄を作つて置くといふは却々有難いことには思へぬのである。同やうに化土は眞の慈悲の淨土が見え無い者が入れられる有難い所にはなりて居らぬのである。

處が之は意味深いことで、佛が十九、二十の願を作られたといふも、矢張りそれに應じる者にそれを以て手引きして、終に眞實の慈悲海に引き入れて下されんこの十一章から説いて行かねば分らぬのであるが、それを明了に言ふためには戻り過ぎるも、法然上人から言ふて行つたがよいかと思ふ。

抑々法然上人の説かれた處は、——喰はまたもとの處になるも——佛は我々病人の如何なる物も喰べられぬのを哀れみ思召し下されたの故、堅い戒行修行の喰べられざるその者に、喰べ易き大慈大悲のお粥の南無阿彌陀佛を興へて助けんとあるが選擇本願の御心である。故にその親の下さる親心のお粥を喰べよ——と言はれたが、法然上人の『唯念佛せよ』の御教化である。それは決して無茶苦茶に押し付けて仰しやつたのでは無い。汝他の物が喰べられるならよけれども、病氣で汝は喰べられぬのである。その喰べられざるを哀はれみて救はんと、佛が態々こしらえて下されたこの粥が佛のお眞實なれば、『之を頂きなさい、』と言はれたのである。言ひ換へれば法然上人の『稱へよ』は『頂きなさい』の意味である。即ち親鸞聖人はその仰せ通りその親のお粥を頂いて、南無阿彌陀佛々々と喰べられたのである。

處が茲で『イヤ眞宗は稱へるので無い、信するので

爲めの慈悲心に外ならぬ。それは然うして下さるて無ければ何處へそれて行くか分らぬ奴、眞の親心の程は分らずして、自分でいつ角遣れる積りて、迷うて行く奴が澤山ある。餘り好く無い例であるけれども、國家が法律を設けて人を監獄に送るは、然ういふ所に置き遷善改過せしめんと、國家としての慈悲心に外ならぬ。處が這入つて行く奴の方は、その慈悲が有難いとも何とも思ふて居らぬのである。その慈悲が分つて我が身の惡かつたことが知れた者なら、監獄を出るところが出来ないのである。故に化佛であらうが化土であらうが、皆な是れ願海より現はれた廣大のお慈悲なのである。けれどもそれに往く者の方からは、それが慈悲で無いことになつてある、と斯うなるのである。

これは『歎異鈔』十一章に斯ういふ御文がある。一文不通のともがらの念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛まうすか、また、名號不思議を信ずるかといひおどろかして、ふたつの不思議の仔細をも分明にいひひらかずして、ひとのこゝろをまどはすこと、この條かへすもこゝろをとめておもひわくべきことなり。

ある』といふことが起つて来る。するとお粥は頂くのであつて、喰べるので無いとなるが、お粥は頂いて喰べなければ何もならぬのである。喰べさせるものに作り上げて下されたがお粥である。處がその喰べるは、我々喰べられぬ者に喰べさせ度いとお粥のお心を頂くから自然に旨い——と喰べられるのであつて、自分の方から喰べやうと思つて喰べられるので無い。然るに一方に法然上人の仰せを聞き違えて、『だから喰べるのだ』と喰べることにばかり氣を入れ、肝腎の頂く方は忘れて仕まつた連中が出来て来た。即ち法然上人の他の弟子方は、本願のお粥は之を頂くから喰べられるのだといふことを忘れて仕まつて、『唯喰べよ』と喰べることにばかり言ふやうになつて来たから親鸞聖人は、『唯喰べる』と言つてもこの粥は、その親のお心を頂かなくては可かぬ、信じ無くては可かぬ』と、茲で信に變つて来たのである。併し信じよと言つてもそれは決して喰る勿といふことでは無い。『唯喰べる』といふの間か喰べるを自分の行にして言ふやうになつたから『何を言つて居るか、この粥は喰べられぬ者に喰べられるやう佛よりお興への粥で無いか。そ

のお與への思召を頂かなくてはいかぬ、お粥のお心を頂かなくては可かぬ」と、之が法然上人の「喰へよ」が「頂け」の信に變つて來たのが親鸞聖人である。故に聖人は「正像未和讃」巻頭の和讃には

彌陀の本願信すべし、本願信するひとはみな、

攝取不捨の利益にて、無上覺をばさるとるなり。

そうしてそれは聖人にすれば法然上人の仰せられた處をその儘仰しやつたに外ならぬから「正信偽」には法然上人のことを

眞宗の教證を片州に興す。選擇本願を惡世に弘む。

と讚歎なされてある。斯く、親鸞聖人は法然上人の念佛を本願に替えて仕まはれたなど際どく言うのであるけれども、内容に至りては更に變つてなど居無い。「選擇集」に

念佛の行者必ず三心を具足すべきの文。

といふやうな具合に、類に「念佛の行者」といふ語が使つてある。あの「行者」は即ち信なのである。行信關係は之で了解されるのである。それを少くひねくつて、法然上人も信を言ひたかつたのであるけれども、時代がまだだつたからなど言ふから、法然上人は宛然て僞

備になつて、活き無いことになつて仕まつてある。以上が法然上人の「稱へよ」が親鸞聖人の「頂け」の信に變つて來た筋合ひを申したのである。

四 誓願不思議、名號不思議

さて茲迄はよかつたのであるけれども、すると後になりて、人が何の計らひも無く南無阿彌陀佛々々と喜んで居るのを見て、「オイ、々々、お前は誓願不思議を信じて念佛して居る方かい。又名號不思議を信じて居る方かい」と。斯ういふことを言ふことが起つて來たのである。即ち言ひ換へれば「お前は頂いた方なのかい。喰べた方なのかい」と、「ふたつの不思議の仔細をも分明にいひひらかずして、云云」と「歎異鈔」に仰せられてある處である。處が斯ういふことを言うやふになつたのもそれには矢張り原因がある。それは誓願不思議を信ぜずして念佛して居る方はよろしく無いのである。

之は私共も初めは「淨土和讃」巻頭の和讃に

彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひとは、
憶念の心つねにして、佛恩報するももひあり。

子供の時講釋を聞いた時に、淨土眞宗は信心と聞いて居るのに「稱えつゝ」が邪魔になり、分らなくて困つたのであつた。すると又學者の書いた物を見ると、學者といふものは六つかしいもので、この「つゝ」は何とか「つゝ」で、教えを信ぜよといふ意であるなど、大層えつゝとあるので具合がよい、斯うあるのて有難いのである。それは南無阿彌陀佛々々と、親の下さる御馳走を腹一杯味ひつゝ、有難くその御馳走のお眞實を頂かせて貰ふのである。こゝが法然上人が親の下さる念佛を「稱えよ」と仰せられた處である。それ故親鸞聖人がそれ頂かれた時には

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よき人のおほせをかうふりて、信ずる

ほかに別の仔細なきなり。(歎異鈔二章)

『有難う』とその仰せ通り、親の下さる名號を南無阿彌陀佛々々と稱えつゝ、そのお眞實の程を喜ばして貰ふのである。そうしてそれを裏から言ふと次ぎの「和讃」に、

誓願不思議をうたがひて、御名を稱する往生は、

宮殿のうちに五百歳、むなしくすぐとぞときたまふ。この仕て見やう無き病人をお見捨て無きお眞實の南無阿彌陀佛なることを思はず、唯稱えるだけの方である。即ち「親が稱えよと下されたのだから稱える。褒めて下さるから稱える」と、言ふことさゝの腹で稱える方である。それは念佛を我が身の善にする方故、その方の往生は「宮殿のうちに五百歳、むなしく過ぐとぞときたまふ」——そこでこの自分が稱えての者が化土、眞の御眞實を頂いた方が眞佛土と、斯うなるのである。

處がこのことが次ぎにゆくと今の如く、「お前は誓願不思議を信じて稱える方かい、名號不思議を信じて稱える方かい」と。——處が之には言葉に間違ひがある。「誓願不思議を信じた方かい」はよいが、名號不思議の方に元は不思議はなかつたのである。誓願の不思議に夜明けて稱えると、明けずに稱えると、この二つだつたのである。も一ついふと誓願不思議で名號を稱える方と、誓願の不思議はたのます、唯名號ばかり稱える方と、斯ういふと言葉は正しいのである。それを名號不思議といふと、既に不思議を信することになるか

ら言葉が變挺へんていになる。既に不思議となれば、不思議に二つは無い。親が病人に喰べさせ度いのお心と、そのお心から作り出して下された粥と、共に尊い親のとなれば、物は一つ物になつてあるのである。それを茲のは言ひ損なつて、『名號不思議を信じた方かい』は同じことになつてあるのだから、そこでそのことを解釋せられて次には

誓願の不思議によりて、たもちやすく、となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものを、むかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせ、生死をいづべしと信じて、念佛まうさるゝも如来の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからはからひまじはらざるがゆへに、本願に相應して眞實報土に往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じたてまつれば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議ひとつにして、さらにことなることなきなり。

之は即ち十八願の眞實信である。又同じことを繰返すも、我々病人の仕て見やうなきを哀み思召し、その者

つぎにみづからのほからひをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけさはり二様におもふは、誓願の不思議をばたのますして、わがこゝろに往生の業をはげみて、まうすところの念佛をも自行になすなり。このひとは名號の不思議をもまた信ぜざるなり。

即ちこの方は誓願の不思議も名號の不思議も信ぜぬ方である。即ち法然上人が『お粥を喰べよ』と仰せられたのだから』と、喰べよの仰せを自分の方から喰べよの意味にとり、『仰せ通り喰べるのが善いのである』と、『自らの計らひを挟み、善惡の二つに就きて往生の助け、障り二様に思ふ』である。即ち『仰せ通り稱えるのはよい、助けられる、稱えぬは悪い、救はれぬ』と、二様に考へて、『故に自分は稱える』と稱えるは、初めから親心の有難さは分つて居ぬのである、とである。之は私の處に聞きに来て下さる中にもある。『先生は頂くと喜ばれるも、頂かぬと苦しい顔かほされる、憎みなさる』と、斯ういふ風に思はれるはそれである。私は頂かれぬのが彌々氣の毒と、頂けるまで言はうといふてこそあれ、憎むなどは更に無い。それを『いつ迄も

に喰べられる粥、手織を興へて助けんと思ひ立ち下されたが佛の誓願故、そのお心を頂いてお興への粥、手織りを有難く着、喰ふとなれば、手織お粥が有難いもそのお心が有難いも一つことであつて、誓願名號の不思議、更に異なること無いでないかとの言葉である。

五 三願轉入

處が次のは『この粥喰べると善い子にして遣る』の方で、その親のお心と聞いても『却々、有難い』と喰べぬ奴が居る。然ういふ者に『このヒマシ油を飲むといふ子ぢや』とたらかして飲ませるは假である。故にこの方は親の眞意で無い。親は然ういふこと仕度くは無いのであるけれども、如何せん、如何なる物でも喰べられる氣で、容易に親のお粥を喰べやうとせぬ奴が出来て來た。そこで然ういふ者には然ういふは、佛の本意で無けれども、子供の方が褒められ度いが一杯の性分の奴故、然ういふ者に喰べさせるには『これ喰べるが善いのおぢや』と、之が現はれて來たが十九、二十の願である。故に次には之を言はれて、

分らぬと先生の御機嫌が悪い、寄りつけぬ』と、それは自分の方から然う仕て仕まふのである。然ういふ風に佛のお慈悲に寄り附けぬ状態が化土である。然ういふ風に佛のお慈悲に自分から限りをつけてしまふのである。故に南無阿彌陀佛々々と口に念佛しながらも、それがお見捨て無き親心のお粥であることは思はず、『自分が斯うやつて稱えて居るのが善いのだ』と、それは念佛迄を自分の功にしてしまふので、それでは名號不思議のお粥の味ひも分つて居らぬのである。即ち化土は然ういふやうに、形は似て居つても不思議が分らず、眞の親の思召の分らぬ處の有様である。處が斯く此方は分らず、稱えて居るが偉い位に思つて居る奴を佛よりは何うあるかといふに、

信ぜざれども邊地懈慢疑域胎宮にも往生して、果遂の願のゆへに、つゝに報土に生ずるは、名號不思議のちからなり、これすなはち誓願不思議のゆへなればたゞひとつなるべし。佛は何處迄も深く分別して下され、『マア、喰べて居れ、』と、その中には分る』と、何處迄もお見捨て無き御眞實の故に、

定散自力の稱名は

果遂の願に歸してこそ、

あしへざれども自然に、眞如の門に轉入する。

段々善い／＼で喰べてる中に『成る程この粥はよい、如何にも腹にこだわらぬやう出来てある。之は喰ふのが偉いより何より、第一これ喰つて居ると身體の氣持ちがよい。之は喰べなとあつても最早や喰べずには居られぬ』と、次第にお粥の有難味、名號不思議が分り出し『成る程あんなに迄して喰べさそうとして下さたは、斯ういふ粥故、之を喰べさせやうとの、親が色色との御眞實の顯現であつたか、有難い』と、終にそこに氣づかしめられるやうになつたは、然う迄しても届け送げすには措かぬの果遂の御眞實故、とどうそのち力で誓願、名號の不思議が分らせて貰へたとするのである。即ち『救異鈔』には斯ういふ廣大のお慈悲であることが書いてある。それが『教行信證』では四角い漢文である爲め、却つて分り難いのである。

殊にこは實際頂かして貰ふ上には有難いことと、我々何程その親のお心を自覺せよ／＼と言はれても、一寸それに引懸りにくいのである。爾らば然ういふ奴は勝手にせよ』それでは全く絶縁になつてしまふ。即ち

本意で無い。彌々その手引きで佛の眞意に到らせて貰へた時が、初めて眞佛、眞土である。それは先きいふ、私が厳しく言ふ故、矢張り『先生も分らぬ間は善う思ひなさらぬ、悪く思うて居なさる』然う思うて居る處に思ひ懸けなく、それが然ういふ者に知らせんとの廣大のお眞實であつたことが分ると、『成る程そらいふ有難い思召であつたか』と、何もかも一時に夜が明けて、眞の思召が知らせて貰へると同じである。

そこで初にも言ふが如く『眞佛土卷』末には『然るに願海に就て眞有り、假有り云々。』——假の本願も願海より現はれて我々を導いて下され、——我々此方が如何に疑はうが隔てやうが、然ういふ疑ふ者に何處迄も疑はぬ心を持ち哀はれみて下さる御眞實が假の本願である。然ういふ御眞實である爲に終に如何な疑ひの者もその疑ひの心を融かされ、眞實本願に入らしめられて仕まふ。そこで然ういふ疑ひ心の定散自力の者が十九二十の願の機である。其の機の者を佛は何處迄も疑はず仕て下さる處のお眞實が十九、二十の願となるのである。それ故十九二十は方便の願故不思議で無いと思ふたら大間違ひである。十九二十は然ういふ手立て

斷れる可き奴を切らさぬ假の本願が現はれて来て、『マアア喰べて居れ／＼、喰べて居るのが結構ぢや／＼』といふて下さる。即ち此方はいつ角善いこと仕て居る氣で喰べて居る處に、何ぞ知らんそれは然うなとして、然ういふ分らぬ者に何處迄も知らさずには措かぬのお慈悲の機關である爲に、終にその者が『定散自力の稱名は、果遂の願に歸してこそ、あしへざれども自然に、眞如の門に轉入する』ひと度びそらいふお眞實であることが分ると、『成る程そらいふお心のお粥であつたか』と、誓願、名號の不思議が、一時に一つことに分らせて貰へるのである。之が十九二十の願によりて、終に不思議を知らしめて下さるのである。

六 假の本願の意義

斯く假の本願を以て然ういふ者に知らせん、それが佛の御眞實にあること故、即ち假の本願も願海から現はれて来る。併し来るは来るが假故、彌々眞の思召が分つたとならぬ間は、——猶ほそこに引か／＼つて居る間は、矢張り化佛、化土である、未だ報佛、報土といふことは出来ぬのである。それは假故、未だ佛の

然ういふ者に頂かせて、眞實に引き入れて下さる本願の不思議が十九、二十の願である。それは常に言ふ眞實とは、眞實ならぬ者を何處迄も見捨てぬものが眞實であるといふと同じ處になつて来るのである。このことを常に際立て、言ふも、案外眞宗の人にはよく聞き取つて貰へぬのである。

親鸞聖人の『御消息集』の中には、斯ういふことが書いてある。聖人御晩年の頃に、念佛は却て是れ邪見の法であるといふ者が出て来て、訴へが起り、關東にあつた聖人の弟子方が鎌倉に引き出されて刃向ひを受けたことがあつた。その時聖人が下された御消息に、『この念佛のことに就き彼れ是れ言ふことが起ると、法然上人の時に然ういふことがあつたあとで、彼の承久の亂が起つたことが思ひ合はされる。故に然ういふことの無いやうに、念佛喜ぶ程の者は、然ういふやうに念佛を憎み誹る人を憎まず、それに就けても彌々世のいのりに心を入れ、世の中安穩なれ、佛法弘れがしと、念佛稱へよ』とのことが仰せられてある。法然上人でも、親鸞聖人でも、いつもこのことを仰しやつてゐる。それは『然ういふ風に色々あ、斯ういふ處の、その

世の中が安穩になるやうに、このお見捨て無いお眞實が行き届くやうに、朝家の御ため國民のために、念佛を申し合はせ給ひ候はゞ、目出度く候べし」といふのである。即ち十九、二十の願もこれになるのである。故に眞宗の者は無暗に自力を排斥するのであるけれども、佛は斯く其の自力の者を斥け給はず、其の者に何

處迄も等はざる眞實を持ち、終に其の者がその自力を翻して眞實に入る迄眞實に仕て下さる處の本願が十九、二十の願である。そうしてその彌々眞實が徹底した處が眞佛土、未だそれに到らず假に停つて居る間が化土となるのである。(以上)

(第十四夏季求道會講話の一節)

人生最終の歸結

近角常觀

一 四生の終歸、萬國の極宗
『人生最終の歸結』は簡單に言へば『人生の終歸』である。聖徳太子の『十七憲法』の二條に

篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり。即ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世何れの人か、是の法を貴まざらん。人尤も惡なるは鮮し、能く教ふれば之に従ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直さん。

四生とは生きとし生けるもの、ことである。『歎異鈔』には『六道四生の間』との語もある。佛教では胎、卵、濕、化と申して、生物をその生れて來る所により四通りに分ける。或は當時の印度の博物學であつたのかも知れぬ。その生きとし生ける——今日て言へば即ち有らゆる人類の終歸である。萬國は國をなす有らゆる國家、極宗はその據り所である。之等の言葉は平日左程に氣に留めて居ぬのであるけれども、今日時勢の變

化より考ふれば、彌々その意味の一通りでなきことを感ずるのである。

それは近頃著しき問題は、抑々人類は、——有りとある人間は、何を據り所とすべきか、それに就き思想問題、労働問題、社會問題起り、紛々囂々を極めて居ると見てよからうと思ふのである。單に一國に限らず、有らゆる人類は、抑々窮極は何を據り所とすべきか、それが問題となりて種々なる混雜を起して居ると、考へてよからうと思ふ。然るに今聖徳太子の言葉には、斯く人類の據り所は三寶(佛法僧の三寶)である、乃至佛の一つである。之で無くてはいかぬと言はれてある。また萬國の極宗といふことにしても、平日は萬國など言はれても響かぬも、今日は國際聯盟、世界平和の時代となりて、萬國の語がよく響く。現に我國にしても、東洋丈けても支那、朝鮮、西比利亞の關係など、種々六つかしきことが起つて居る。太子の時にも朝鮮關係が非常に六つかしかつた。恐らく太子が之を書かれたは、我が日本丈けて無く、朝鮮、支那、色々の國はあつても、萬國が據りて以て立つ可き根本正義が無くては立たぬ故、その萬國の據り所たる可き根本極宗を言は

れたものであらう、と思はせて貰ふのである。——今年紀元節には彌々世界平和の詔勅も下り、それにも『これからは我が日本として丈けて立つて無い、世界の公道に従つて云々』との意味で仰せられてあつた。今後の世界は單に國として丈けて無く、各國とも據る可き根本正義に據らなくてはならぬことになつて來た。斯く萬國の上に、據る可き公道が無くてはならぬ故、それを極宗の語で言はれたものと思はせて貰ふのである。これ迄は國際間には道德無し。——國內間にはあつても、國際間には道德無いといふ時代であつたのが、今度の世界大戰の結末を着けるには、是非萬國一途の據り所が無ければならぬ、といふことになり、國際聯盟などといふことを遣り出したは、或る意味では世界が萬國の極宗などといふことに、目が醒め出したとも言へる。然ういふことをウイルソンなどが遣り出したは、著しいとなつて居るのであるも、何ぞ知らん太子は既に千三百年も前に、支那、朝鮮などに對し、そういふことを考へてお出でになつたのであつた。この頃は太子が大變讚歎さるゝやうになつて來て、太子が、

日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す。などの語は、太子が隋國に對し、日本の地位を占められたものと言はれて居る。併し日本の地位を占めた丈けが太子の偉大な點で無い。支那、朝鮮、萬國が據つて以て立つ可き信仰の本源、世界の公道を斯く憲法の上に明示せられたは、著しきことと思ふのである。これは先帝陛下が

之を古今に通じて誤らず、之を中外に施して悖らず。と仰せられたと、同じであると思はせて貰ふのである。

二 講和會議と日本

實は先達て私の友人、——講和大使と一緒に講和會議に行き、勞働會議にも日本を代表して重要な地位を占めた人が歸つて來て、話を聞いた。色々あつた中に、『どうも日本に居る時は、日本が膠洲灣を取り損なはせぬか、イヤ南洋諸島がアースラと、日本の立場を維持することが日本の問題となつて居つたのであるけれど、も、實はあの時巴里へ集つて來た人達の頭には、獨逸があつたやうの狂暴を極めたのであるから、今後は如何にすれば世界の平和を實現することが出来るか、正義を

言ひ切られ、そうしてそれは篤敬三寶の一つであることとを言うて下されたは、如何にも著しきことと思はせて貰ふのである。

猶ほ言ひかけたから、——我々、今度の講和會議には一方に國際聯盟を遣り、一方に勞働會議と、何だか關係遠い問題を同時にやつたのは何ういふものか、との考があつたのであるけれども、之は聞いて見ると、今度の大戰の結果として起つて來た著しい事柄だそうである。それは今度の戦争に各國とも何の部分が最も働いたか。それは兵隊と、それに軍需を供給した勞働者だそうである。今度の勝利は全く兵隊と勞働者の力により爲し遂げられた。そこで國家として夫れに報いなければならぬ。そのことが色々に現はれて或は勞兵會が起り、或は勞働問題が起つて居るのだそうである。それが起つて來るのを各國の政治家も見たから、矢張りそれを何とか適當に考へ無ければならぬ。またそこになると婦人も大に働いた故、婦人問題も起つて居るといふ具合に、即ちそのことが一國の萬國のとなり、牽いて世界人類の問題となり、種々なる問題が起つて居るのだと考へさせらるゝのである。

維持することが出来るか、然ういふ一つの理想を持つて集つて來て居るやうであつた。之に反し日本では、「折角遣つたが、損をさせらるゝやうのことになりはせぬか」と、自分のことにのみ没頭して居るやうに見える、甚だ淋しい思ひがあつた。もつと大局に、——世界の根本に目を着けて行くて無ければ、各國に對しても心細いことに思ふ」と、いふ話があつた。之は如何にも然うであつたらうと思ふ。漸く五大國の仲間に這入れた。愚圖々々して、洩れて仕まつては困る。折角やつたのを、損させらるゝやうのことになりはせぬか」といふ方にのみ頭が奔りて、如何にして世界の平和を來らしむべきかの根本の問題に向つては、全く缺けて居つたといふのである。こは日本として自ら反省すべき言としていはれたので、決して非難の意味で言はれたので無い。然ういふことを言うて居られたから考へても、太子の四姓の終歸、萬國の極宗を言はれたは、——太子の憲法は國內のみの憲法では無い。四姓、萬國、何處に押し出しても必ず之で遣つて言けるの自信あるはもとより、——『何れの國、何れの人か是の法を貰まざらん。』何人も何國も、之を外にして立場は無いと

三 人類最後の平和とそれに到る原則

猶ほ一步進めて、その他參考となる可き色々話を承つた。私が豫ねて思うて居つたには、二十年前西洋より歸り日本を見るに、日本人の爲ることは、形のみ西洋のを真似し、その精神は見えて居らぬのを遺憾として居つたのであつたが、この間もその方に『然ういふことがあらうと思ふが』と聞いて見たら、果して西洋人の勞働問題など眞面目に遣ることは、大分日本のご様子子が違ふそうである。殊に物質、——生活問題の叫びなど聞くと、全然パンの問題だと思へるが、それが向ふのは根本から研究し、理想から割り出し、『斯くならねば』の理想から起つて來た、眞面目なる運動であるに至りては、日本で遣つて居るのとは、大分違ふそうである。日本の新しき人のは、直ぐ西洋の本のをその儘翻譯し、また運動も唯群衆が集つて騒ぐといふ遣り方で、又之を壓迫する方も深き考も無く、遣つて居るやうであるが、向うのは理想を根柢として居る故、遣り方が眞面目であり、皆なが生命懸けて遣つて居ることである。この點に於ては遺憾ながら日本人のは雜漢である、西洋人の方が根柢があると思ふが、——

併し私が考えるには、それは如何にも然らうあらうが、斯く何處迄も自分の考へることが正しいといふ行き方ばかりでは、——例へば國際聯盟にせよ、勞働問題にせよ、それ程理想的に考えれば考える程、『自分の主張が正しい、正義である、』『相手がアーするから、此方は斯う』と、いつまでもこの相對の立場でゆくばかしでは、成る程武器の戦ひは終つたが、今度は貧富の戦ひとなり、如何なる時に眞の人類の幸福の時は現來するのであらうか。最後は銘々斯く理想の根底に立脚して理想上の戦までやるとなつては、結局我正しいの主張ばかりで、終に人生の歸結を見出し難くなると思ふが、この點に於ては西洋人も一歩を進め、人類の眞の幸福、眞の最後の平和に到る爲めには、もつと然らういふ自分の立場から離れた、各人各國自分の立場のみを考えず、もつと違つた據る可き最後の原則を見出す無ければならぬ譯けであると考えるが、然らういふことに就きては西洋で何か聞かれたかと聞いて見たら、それは彼地でも無いやうであつたとのことであつた。處が憲法では、その四姓の歸結、萬國の極宗を、斯く信佛のつてに見出してあられる。そう言ふと西洋にも神がある宗教が

の問題に於てそこを申せばよいことになる。殊に茲に太子が人間最終の歸結を言はれたとして何處に味ひがあるかといふに、

抑々我々は他人といふこと、外界といふことを基本として、外界と對立してア、斯う考へることにて立つこと、考へて居るのであるけれども、必ずしも外界の善し惡して立つので無い。然らういふ自分自身が眞に立つ可き立場さへ見出すことが出来れば、必ずしも外界は考へる要が無い。自分自身が安んずべき立場を見出すといふことが肝腎の問題なのである。それさへ出来れば外界との關係は自づから解決さるゝ。爾るに各人がさういふ自分の立場だといふことに氣をつけず、人が、外界がといふことにのみ考へて居るから解決が來ぬとなつて居るのである。故に各自、自分が救はるゝことが出来るか、出來ぬかといふことが最後の問題である。猶ほ言へば信仰なることは、人は總ての事柄が外界に對しての問題であると考えて居るのであるけれども、然らういふ相對的對他關係から悉く離れ、それらから超絶して、自分一人が安んずることの出来るのが、絶對信仰の特色である。然らういふことが我々の内界に

あると言はれるかも知れぬが、その神なり宗教なりが、斯く互に五分々々で遣り合ふ、争ひの上の神なり宗教なりでは、最後の平和に到達することは出來ぬのである。人類最後の平和は、總ての各人各國が據りて以て各自に安心を見出し、立場を見出し、さうしてその國その人丈けて無く、總てが據りて以て立てる根本原則が來なくては、人類最後の平和は得られぬと考へるのである。そこになると太子がその最後の據り所は篤敬三寶の一つであることを示されたは有難いと思ひ、その恵み一つに救はるゝことが人生、人類最後の歸結であることを申さうと思ふのである。要する所は現に各般の問題錯綜してあるが、それが各自が救はるゝ人生最終の歸結を見出すてなき限り、解決が無いことを申し度いのである。

四 佛教の特色と西洋の宗教

大分問題が大きくなつたが、併し信仰問題は之を放てば六合に瀾漫し、之を摺れば方寸に收るが信仰問題故、斯う言へば、世界、國際問題になるが、それが我一人が如何にして安心さるゝか、人と人との關係に於て如何にして眞實の立場が見出さるゝか、我々個人

現はれて來るが佛教の信仰の著い點なのである。

こはちとをかしい話になるけれども、今春來呂運亭といふ人間が來たことに就いて喧しかつた、朝鮮獨立といふことにしても、かのことを言ふのは基督教の人が多いやうである。基督教の人が『日本が朝鮮をあの如くするのは可かぬ、我々は神の意志によりて獨立するにある、あゝ斯う』と、一面勇ましく氣慨があるやうであるけれども、その如く外界を相手取り、何處迄も争ひ、戦つて行く氣持ちが西洋の思想、宗教に共通の點である。近頃喧まじき勞働問題にしても一方勞働者が目醒めて叫ぶは一面大に見る可きであつて、佛教者が之に對して反感を持つてはならぬも、必ずしもあゝいふ風に遣ることが解決の道とのみ考へるは、何ういふものかと思ふのである。が何うも西洋の思想、宗教には然らういふ風に、相對的にア、斯う遣ることが甚だ多い。殆ど基督教の人達は、佛教がいゝとかいゝかぬとか、日本が、よいとか、悪いとか、善し惡しを言ふのが仕事になつて居るかに見えるのである。何程善し惡し、相對的にヤイ／＼言うて見た處が、全體其の言うて居る人間が矢張り善し惡しの人間であるから、それ

で解決がされやうとは考えられぬのである。此間も私
が餘りに之を言ふもの故友人は「然う言うたとして、矢
張り人類、社會には生活もあり、發展もある。そんな
こと言うて居ると、野蠻人も同じになつてしまふて無
いか」と言ふのであつたけれども、私のは然う言ふの
で無い。却々野蠻人とて戦つて居る模様であるから、
之をそらういふやうに取るのが間違ひである。戦はぬか
て文明の進まぬわけは無いと考へるのである。

五 『數異鈔』の十二章

マア私が理屈いふよりも實例見て貰ふ方が早い。數
日前にも高等學校の徳風會で『數異鈔』を話して「居る
と、十二章に、

たとひ諸門をぞりて念佛はかひなきひとのためな
り、その宗あさし、いやしといふとも、さらにあら
そはずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通
のもの、信すればたすかるよし、うけたまはりて信
じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやし
くとも、われらがためには最上の法にてまします。
たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、みづからがた
めには器量よばざればつとめがたし。われもひと

結構である。我も人も食物は各自の身體を養うて貰ふ
が目的である如く、總ての者が救はれるのが諸佛の御
本意にてはしませば、設ひ卑しくとも『御妨げある
べからずとて、憎い氣せずば』誰れの輩がありてそれ
に反抗をか爲やう、と斯う言はれて次には

かつは諍論のところには、もろ／＼の煩惱おこる。
智者遠離すべきよしの證文もさふらふにこそ。

之が一言にいふと、人がア・斯う言ふからとて、それ
に相對的にア・斯うやるからいつ迄も争ひが止まらぬ
のであるけれども、『イヤ私はその卑い者であります』
と、そこを此方が切れて仕まへば、争ひ喧嘩は出來ぬ
て無いかと言はれたのである。之が何かといふに他方
信仰の上からは、各自が相對的態度を離れ、絶對の御
眞實一つに安心出來たのであれば、それが生活の上に
表はれて來て、自然に斯ういふ生活が起つて來ること
を言はれたのである。

六 親鸞聖人の函面

併し之が眞に體得して言ふので無いと、皮肉で言ふ
と同じになつて困るのである。『念佛が本統なのだけれ
ども、それを然ういふ風にいふ貴様が馬鹿である、ハ

も生死をはなれんことこそ、諸佛の御本意にておは
しませば御さまたげあるべからずとて、にくひ氣せ
ずは、たれのひとかありてあだをなすべきや。

書いてあることは、經釋を讀み學問せぬ者は往生不定
であると言ふて、矢張り他方の信仰に於ても『經文を
讀まねば、學問をせねば』といふものがあるけれども、
そんなことを氣に懸く可きで無い。と書いて、當時專
修念佛の者と聖道門の者と争ひを企て、互に優劣を
論ずるのであるけれども、そんなことをするのが、そ
の謂はれ無い。『設ひ諸門舉りて、念佛は甲斐なき人の
ためなり、その宗淺し、卑しといふとも、』——それに
對して『念佛が本統である』と主張するから、イヤ念佛
は無間の業だなど、争ひになつてゆくのであるけれ
ども、全體斯く争ひを仕て居るといふことが間違ひで
ある。設ひ何程淺し、卑しといはれても『更に争はず
して、我等が如く……誰れの人かありてあだを
なすべきや。』——設ひ何程甲斐無い、詰らぬと言はれ
ても『然うですか、私はその甲斐無い者であります』
と争はず、設ひ何程自餘の教法は優れて居りても、如
何なる物も喰べられぬ病人の私の爲には、親の御病が

イハイ馬鹿の私であります』では響ひかぬ。眞に心が
ら馬鹿と思ふから、馬鹿な私でありますと出て來た處
で尊いのである。親鸞聖人のは茲がいつも然うなつて
ある。『御文』にある御言葉にて

たとひ牛ぬす人といはるとも、もしは後世者、も
しは善人、もしは佛法者とみゆるやうにふるまふべ
からず。

何處迄も『馬鹿である、愚かである、愚癡無智である、
愚癡親鸞であります』といふ按排に、——故に充分聖人
が理解されぬ間は、聖人が皮肉に出られるやうに誤解
されてならぬのである。一方聖人が流罪の時の言葉
には、

主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ云
云。

堂々と一世の人が法然上人のことを理解せず、五分々
々の迷心に拘つて、正義に背いて居ることを痛擧して
も出てになるかと思ふと、赦免の時の御文には、

爾れば已に僧に非ず、俗に非ず、是の故に禿の字を
以て姓と爲す。……此の時聖人右のごとく禿字を
書いて奏聞し給ふに、陛下叡感をくだし、侍臣もほ

一方に思ひ切り言うて居らるゝかと思ふと、一方には愚禿、々々はありませんと奏聞せられ、『陛下寂感を下し、云々』——聖人は色々の手を打たれると思へるも、聖人には斯くいづも両面がある。一方にはツウ々々しいと思はれる程の態度あると共に、一方には斯く飽く迄も頭が下つて居られる。

現に『興御書』は法然上人の説かれる處が怪しからぬといふので、叡山から尋ねが起つたに對し、聖人がその辯明の爲に法然上人の使ひとして出向かれたのであつたが、聖人はそれに對論でもせられたことか、先方に行つて唯サメザメ泣いてばかり。それで歸つて來られたので同門の弟子の人々は齒軋して憤慨し、法然上人の代理として行つた程の者が、泣いて歸るといふことがあるか。大に説明して、趣意を押し立て、歸らねばならぬ處を、泣て歸るとは何事かと聞かれたら、皆んなが淺ましいことばかり言つて、上人の教のこととを彼れ是れいふ。皆んなが淺ましいこと言ふのが悲しくて、それで泣いて歸つたと仰せられたとある。『興御書』が本統であるか何うかは、議論がある處であらう

に没し、常に流轉して云々。

『我が身は現に是れ』といふは、我が身の上のことである、他人の上のことではない。我が身の上の問題といふと、對他關係の問題といふと、別の事とは言へぬも、世間で對他關係と思つて居る問題が、實は我が身の上の問題なのである。『人があゝいふことを爲る』と、ヤイ／＼言うてゐるのは切り無しであるけれども、それは人を然ういふやうに不足に思ふ我が心の上の問題なのである。『信仰得度い。喜び度い』にしても、皆んなが我が身を忘れて信仰攫まうに骨折るけれども、實はそれ程迄に思つてもいづ迄も喜べぬ、濫太い我が身自身の問題なのである。マア世界、人類の問題から色々申し來たつたが、『イヤ私は如何に喜ぶ可きかの自分の問題に急にして、世界のことなど考へぬ』と言はるゝかも知れぬも、夫れ程迄に思つても喜べ無い、信ぜられ無い、然ういふ自分といふことは忘れて、いつ迄も喜ばう、信じやうに目を着けて居るが我が身忘れた話なのである。それは雪降り風寒き人生であるも、寒いは然ういふ風雪で冷やされた我が身が寒くて仕方が無いの問題故、その寒き我を何處々々迄も温めて下さる

も、兎に角聖人には斯くの如きの両面がある。『私は禿てあります、愚禿であります』は、頭を上げて言うのでは無い。其の如く何程その宗淺し卑しと言はるとも、『その通りの下根の凡夫、一文不通の私であります』は、知つて知らぬ顔するので無く、知らぬで知らぬといふのは本統である。聖人の教の上より言ふ時は、實は他方の信者が色々の出來事に遇ひ、『これも前世の因縁約束である、自分のそれ丈けの業が出て來たのだ』と、茲へ出て來るは、如何なる出來事に遇はふと、それは人の爲め外界の爲めに、然う爲されたので無い、自分自身の淺ましい業が現はれたのであると、眞に茲に頭の下つた處があるから、それが出て來るのである。今『私が愚かてあります』も、この頭の下つた處から出て來るから、何程他から愚か、甲斐無いと言はうとも『如何にも言はるゝ通りの自分てあります』と、即ち茲は眞宗の罪惡觀の味ひである。

七 我が身自身の問題なり

茲て一言仕て置くに、全體他力信仰の肝腎は、善導大師の機の深信の文に、
我が身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常

處の慈悲の火に遇へば、如何に風雪はあつても、此方は温にあらせて貰へることが出來るのである。それを雪が降る故、風が吹く故と、いつ迄もそれが取り去られる方にのみ目を着けて、今現に斯く寒い、仕方の無い我が身自身を如何に處置す可きかを忘れて居るの

故に彌々信仰の最後に出る時は、それは種々なる問題山の如くあるも、自分の豫想した方角で信仰に入つた者は一人も無い。現に私など、宗教が腐敗して何う斯うと、騒ぐ丈け騒いで遣り扱いた最後に、『今迄それ程宗教を歎き、人を彼是れ言うて居つた自分自身がいけなかつた。何處迄も人に不足を持ち、恨みに思ふ處の自分てあつた。之は言うてゐる自分の暗黒が言はせて居つたのだ』と、我が身の仕やうの無いのに突き當つたのであつた。茲が相對の問題が絶對に行く處である。それを我が身の方には氣をつけず、對境ばかり考えて居ると、

殊に青年の人など、『信仰得たら何んなに喜べるであらう』と、喜べる方にのみ目を着けるから御眞實の程が分らぬのである。喜べるので無い、喜べぬのである。

天地に躍り上る程に喜ぶ可きことが喜ぶぬのである。

故に喜ぶぬから可かぬと思ふて居る所を、イヤその喜ぶぬは煩惱の所爲なれば、佛豫て知召し、煩惱具足の凡夫と、そこを見て下された御眞實と、それを聞かされた時に、此方の思惑通りに喜べて安心するので無い。喜ぶ無いを見て下さる慈悲で安心させられるのである。今の『たとひ諸門擧りて、念佛は甲斐なき人のためなり、その宗淺しいやしといふとも』にしても、『イヤ淺く無い』といふは議論である。『ウン如何にもその如く淺く仕方なき自分である。』處が他方は斯の如き經釋の行くちも知らざる者の爲のを見捨て無き慈悲と、それが来る故、その者が善し惡し離れて安心させて貰ふことが出来るのである。

八 『佛説まことなりけりと知られ候』

のみならずこの直ぐ次ぎの所には、
故聖人の喜ばせには、この法をば信ずる衆生もあり、
そしる衆生もあるべしと、佛ときをかせたまひたる
ことなれば、われはすでに信じたてまつる。またひ
とありてそしるにて、佛説まことなりけりと知られ
さふらふ。しかれば往生はいよく一定とおもひた

よく／＼案じみれば、天におどり地におどるほどに
よろこぶべきことを、よろこばぬにていよく往生
は一定とおもひたまふべきなり。

『喜ぶぬて、くまは、人が誹るから、くま』と同じで、人が惡口いふを聞いて、『あ言はれてはいかぬ』と同じに、『あ、自分は斯んなに煩惱が起りてはいかぬ』は、人と自分の違ひはあるが、心の向きは同じである。處が聖人は『人ありて誹るにて、佛説まことなりけりと知られ候云云』と同じに、『喜ぶ可きことを喜ばぬにて、いよく往生は一定と思ひ給ふ可きなり』

よろこぶべきころをおさへてよろこばせざるは、
煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、
煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば云云。

『この法をば信ずる衆生もあり、誹る衆生もあるべしと、佛説まかせ給ひたることなれば』とあると、全く同じである。

話が次第に微妙になるが、『子供が死んだ、悲しい助け度い』の問題にしても——處がその如く何程思うても救はれざる、心淋しい、仕方の無いのを哀はれみ、

まふべきなり。

管に人が惡口するからとて、『私はその愚か者でありませす』と争うて行かぬ丈けて無く、その愚かを何處迄もお見捨て無き慈悲なれば、此の愚か者がこの慈悲に救はれて大に自信がある譯けてあるが、更に聖人の御言葉にする時は、その如く誹る人があることに『佛説まことなりけりと知られ候』と、更にそのことが、自分の信念を養うて貰ふことになり、確めさせて貰ふことになる。故に惡口言ふ人のあることに『爾れば往生は彌々一定と思ひ給ふ可きなり』——話が飽く迄徹底してある。

之など人の惡口いふ問題で言はれてあるのであるが、九章にしても同じである。九章は

念佛まうしさふらへども踊躍歡喜のころちろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんとまうしいれてさふらひしかば、

『念佛するけれども喜ぶぬ。急ぎ淨土へ參り度い心の無いは、これでは眞實の信心ではあるまい』と、唯圓坊がお尋ねした時仰せには、

見て下さる處の御眞實である。イヤ然う聞いても、矢張り助け度い／＼と思ふと言はるゝかも知れぬが、併しそれが思ふやうになる程ならば無常とは言はぬ。老少不定と佛豫ねて説き措かせ給ひたは、その助らぬを見てそれを言うて下されたの故、そのことの起るに見ても『佛説まことなりけりと知られ候』と、茲同じことに出て來られるのである。總て問題の解決さるゝは、我々いつも『あ仕度い、斯う仕度い』それ思うて居てそれが爲らず、いかぬのである。この『斯う仕度い、あ仕度い』の思ひが、自力である。處が氣をつけぬと何處迄も自分の思惑の自力の手を振り廻はすことになつて、それが何程遣つても何うにもならぬ、思うやうゆかぬ我身自身であることを忘れることになることを申すのである。信仰問題の歸結は何うしても茲へ出て來る、茲は餘程氣をつけなくてはならぬ。

九 敵陣の火

處が人間は容易に自分のことには氣がつかぬ。今子供が死んで、何程それを取り返し度く思うても、それが取り返されぬのが可哀相故、哀れみお見捨て無き慈悲を聞かされても、それを有難いことには思はず、

矢張り自分が仕度い方に紛れて行くことになるのである。此の間も前號に言うた信心が頂けず、苦しんで居る婆さんが又訪ねて来て、『此の間は分つたやうでありましたけれども、また難有くなくなつた』といふ。『一體貴方は何う思うて居るのか』と聞くと、『夢になりとも佛が来て下されて、助けて遣らうと言いつて下さるとよいと思ふ』と云ふ。そこへ娘が流感で無くなつたといふ母親の人が来て、私はその婆さんに申したのである。『この方は自分の子が死んだ、何故死んだか。ま一度夢になりとも、歸つて来て、話を仕度いと恐痴言はるゝのであるけれども、それが貴方のも同じ思ひだ』と申したのである。婆さんは佛見度いが眞一文字で自分のことは分つて居らぬも、夫人にすれば、『佛に遇ひ度いなぞと、そんな無理な、馬鹿なことを』と、分つて居るのである。又婆さんにすれば、『死んだ子に遇ひ度いなんで、そんな無理なことを』と分つて居るのである。そうして互に自分のことは分つて居らぬ、二つ寄せるとハッキリ出て来る。婆さんが信心頂き度い〜と、熱中仕過る程熱中するは感すべきであるやうであるも、『夢になりとも佛に遇ひ度い』は、妄想で

『か』の問題は無い。——マア茲は微妙な味ひがある處である。今日でも信仰は直覺であると、いふことをいふ。『敵の陣に火をとぼすを、火にてはなきとは思はず』は直覺である。敵陣に火の上のを見て、『あれは何うかな』といふことは無い。處が皆様は『その哀はれむ佛があることが、何うして分る』とやうに受けられる。それは敵陣に火の點るを見て、あれは敵の火だとのことが何うして分る、といふと同じである。殊に火の點るを見ての話ならまだよきも、火を點すといふが、いつ點るか聞き方を任せて居る人が多いので——そこになると眼前敵陣の火を、火とせぬ者は無さしく、私共夢にだも佛に、子供に遇ひ得ぬ、一點温り無き、心冷きを、その冷き限り察するぞ、哀はれむぞの恵みを聞いた時には、その哀れみのお心を外にして佛があるのでは無い。かく、私の冷き、仕方の無き眼りを哀はれみ、その者を何處迄も見捨て無きが、即ち佛のお心なのである。故にそれ言はると、それに疑ひの餘地無いことになる。茲は味ひの深き所である。

一〇 諸佛出世の直説

前號に於ても善導大師の『汝一心正念にして直に來

ある。又子供に死なればそれは夢にても遇ひ度いと思ふ程にも一度遇ひ度い。『貴方の處のお子さんに夢で遇ひましたよ』と言はるれば、『あゝ貴方の所へは参りましたか、私の所へは夢にさへ来て呉れませぬ』といふ按排に。——處がそれ程に佛に、子供に遇ひ度く思へども、それが遇うことが出来ず、その便無き我々とのことである。然るに今我々の『その便無きを哀れみ、それを遣る瀬無く思ふぞ』との、このお慈悲を聞かせて貰ふといふ話である。——

蓮如上人の『御一代記開書』の中には

敵の陣に火をとぼすを、火にてはなきとは思はず、いかなる人なりとも、御ことばのとをりを申し、御詞をよみ申さば、信仰しうけたまはるべきことなりと。

之はよい言葉である。『敵陣に火を點す』は、蓮如上人の時代の群雄割據の狀が見える。敵陣に火が見える『あれは敵が火をあげたのだな』と、それに『あゝ、斯う』の疑ひは無い。今私共、夢にだも佛に、子供に遇ひ得ぬと悲しむ心淋しさを、それを哀れみ、その者を捨てぬのだとの仰せを聞けば、それに『斯うか、ア、れ』に就いて話したのであつたが、即ちあれが直覺、直觀である。『直に來れ』は、佛と私との間に物があるなら『直に』で無い。私の罪深く惱み多きに、それを善うなして、それから無い。その善うなし度いにも爲せぬのが可哀そう故、その爲せぬのを捨てぬが『直に』である。囚人が監獄を出てから迷うて居る。親が『直に歸つて來い！』それは今迄の不始末が何程有らうが、それを此方は氣に留めて無い。寧ろその爲め彷徨き、歸つて來られぬのを可哀相に思ふ故、『直に歸つて來い！』處が此方は、『イヤいつ迄もこの放浪の狀で歸つて行つては親に申譯けが無い。も少し何うかなりて行かぬと、近所近邊にも外聞が悪くありはせぬか』と、それで何うしても歸つて行けぬのである。成る程よくなつて歸へれば立派であるも、親の方よりは、『それは汝が善く出来るならなるも、既に監獄に行き赤い着物着たものが、そんなこと言うて居たをて仕方が益罪みを重ね、深みに墮ち込む基故、——然ういふ汝の仕方の無いのが可哀相で捨て置けぬ。故に早く直に歸つて來い！』である。聖人は『愚劣鈔』に、

直の言は方便假門を捨て、如來の大願他方に歸せよとなり。

偉らき一言である。『方便假門を捨て』は、即ちその『善うなりて、立派になりてを捨て』である。今日の求道者諸氏が『聞いている中に有難くなるのだらう』、『感じたら嬉しくなるのだらう』と、それが方便假門である。我々は難有くなりて、感じて信仰に入るので無い。いつ迄も難有くなりて、感じて信仰に入るので無い。愚かな、感じえぬ者に——その者を信仰に入れて、無い——その感じ得ぬのが直に氣の毒とのお慈悲心なのである。

故に茲は佛の言葉とせず、私の言としていふ方が寧ろ届き易い。マア種々なる方がある。六十七になりて、親が信心一つが大切と言はれたことを思出し、それのみ思うて居らるゝ、とやうの人もある。それ程に思うてもそれが得られぬのである。處がそれ程にしても、そのいつ迄も頂き得ぬことを哀はれむとの、それを聞かされた時には、此方は得られぬからにはや駄目と想うて居る處を、其の駄目な汝が可哀相故、その汝を『我能く護らん』との、それに直きくのお慈悲なのである。

く汝でないことを兼ねて哀はれみ知召し、其の汝を此方が捨てぬといふので無いかと、このお慈悲でましますことを頂なければならぬのである。

一 『能く』の一字

殊に『我能く汝を護らん』の『能く』の一字は、『如何に冷からうが、淋しからうが、我能くそれを察し、何處迄も能く救ひ能ふ』のお心が『能く』の字で、この一字がそのお心を頂くに非常によい。日頃余り言はぬが、善導大師のお言葉には

明の能く闇を破し、空の能く有を含み、地の能く載養し、水の能く生潤し、火の能く成壞するが如し。その如く我々の惱み、冷か、苦勞、缺乏、それが何程あらうが、有る限りを總て、『我能く察し能ふ、救ひ能ふ』のこの何處々々迄もの能力であることが、『我能く』である。そうしてこの語のある處に直ぐ續けて、此の如き等の事、悉く待對の法と名く。即ち目に見つ可し、千差萬別なり。何に況や佛法不思議の力、豈種々の益無らんや。

一寸見ると『明の能く闇を破し、水の能く生潤す』は分るも、それで『如何に況や佛法不思議の力云』は

ある。聖人はまた『直』の言を

諸佛出世の直説を顯はさ使めんと欲してなり。

『イヤ先生の言も、佛の直説と聞けぬので困ります』と言はるゝかも知れぬも、私はそんな風に聞けとは言うて居らぬ。が私共『眞實で無いのを哀れむ故、その眞實で無き者を何處迄も捨てぬぞ』と、この眞實を聞かされるれば、其の眞實は佛のお眞實で無いかと申すのである。それは私の眞實無きに呆れず、眞實無き限り彌彌哀はれみ捨てぬの、佛のお眞實を、直きく聞かせて貰うて居るので無いかと申すのである。そこは今日の直觀、直覺の味ひであると申してもよいが、併し直觀、直覺は『直』の字が此方につく丈け本統て無い。此方から直接に觸れに行かんならぬの氣持ちがある。御眞實の方は向うから直きく、此方へくつ着いて下さるのだから、此方から火に押つ付けに行くと、向うから押つつけられて仕まふとは別である。そこは從來の信者でも、『その儘お受けするばかりだ』と、此方から遣つて居る間は、何れ丈け聞いてもいかぬ。そんなこと遣つて居る者を捉へて、『何故愚圖々々いうて居るか、汝が如何程喜ばう、頂かうと思つても、それでい

受取り難いやうであるも、今佛の力は斯く我々の心に、何程惱みがあらうが、あればある程益々その者を『我能く』の慈悲なれば、如何に況やこのお慈悲に見捨てられるといふことがあるものかである。即ち茲は『我能く』の一語、我々の手の平を反されて仕まふところである。それは常に言ふ如く人生問題にしても信仰問題にしても、我々が慈悲に救はれて苦を離れた處には、一つ常識で無い思想が現はれて来る。

それは私自身など何うしても分らなかつたは何處であつたか、といふに、初は自分が善い積り、従つて人が悪い積りて、思うて居つたのである。爾るに段々、『人に隔てる自分が可かぬ』、『人を悪しく思ふ自分が可かぬ』と氣が付き出すと、『このやうな悪い自分故、いかぬ』になつて仕まつたのである。そうしてその裏は、『如何に世に寛大な人でも、このやうな自分には屹度呆れて仕まはれるだらう』と、これがある。『斯のやうな心の冷いことでは、自分のやうな者は逆も駄目』とこれがある。これが人生問題で夜の明け難い處である。『今迄種々苦心してやつて來たが、斯うなりては最早や逆も駄目』と、之がある。之が或は人生根本

的に、自分の素質が駄目と思つて居られるもあらう。

信仰が得られぬから駄目と思つて居られるもあらう。兎に角『境遇が悪いから、無常だから、人が認めて呉れぬから、駄目々々』と、茲へ突き當つてしまふのである。

處てこの駄目をその儘に仕て、外に信仰聞いても何もならぬ。斯く人生に詰りて駄目と泣く、その駄目を哀みて顛覆してしまふが佛の恵みである。『何に、駄目なことがあるものか、夫れは人からも自分でも駄目と思はれやうが、その汝の駄目なのが可哀相故、その駄目を哀れみその駄目を何處迄も見捨てぬが佛で無いか』と、之が『我能く汝を護らん』である。我々は『謗法闍提廻心皆往』——如何なる者でも懺悔すれば助る。すると『其の廻心が出来ぬで駄目』と、直ぐ斯ういふ風になる。『罪の深いことも分る、佛の難有いことも分る。併しそれが本統に頂けぬから駄目』と、斯く何處かに一つ駄目を附けたがるのが我々の性である。處が斯く何處迄も駄目を離れ得ぬ我々なることを哀はれみて、その駄目をこそ『我能く見能ふ、救ひ能ふ』の大慈悲が『我能く』である。

一二 清水石松翁のこと

殊に善導大師の一言一句が意味深い。親鸞聖人は『愚禿鈔』を書かれて、其の下巻は大師の『散善義』の一言一句を緻密に書かれてある。聖人は斯く迄緻密に讀まれたかと思ふ程に書いてある。——全體大師の二河白道の譬喩は、我々の仕方無きを哀はれみ、見て下さる状を書かれたものであるが、それにはその心淋しき仕方無き我々に、佛よりの仰せは何うあるかといふに、

汝一心正念にして直に來れ。我能く汝を護らん。衆べて水火の難に墮せんことを畏れざれ。

茲で『汝』とは全體我々自身を指された言である。其の自身は四方八面逃げ場無くなりて『茲を斯うゆくのが信仰か、あゝなるの喜びか』と——抑々『夢になりと佛に遇ひ度い』などは、この狼狽が言はせる言である。『それ程に狼狽へ、聽いて見た處が、それで何うにもなりやうなき、仕方なき我々である。』

茲でこの講話で一言し度いは、疾くより會館へ聽きに來て、下された清水石松翁のことである。殆ど十年前より聽きに來られて、極めて法に心懸けの篤い方は、更に無い。そういふ風に人にすることを樂みとして居られたものである。

あつたが、數日前に亡くなられた。今日午後は會葬致す考である。茲で言つて見度いは、その方は却々よく説教に参りて法を喜ばれ、——此の度びも御郷里から手次ぎ寺の御住職が見えて、『善導大師の語に、「過去已曾、修習此法、今得重聞、卽生歡喜」とあるが、翁の如きが其の人であらうと思ふ』とて色々話を仕て居られた。その如く親の時代より喜ばれた人で、十五の時より東京に出て、蠣殼町の米屋町で五十年間暮された。今日蠣殼町に多少の念佛あるは、この人の教であらうとのことである。極めて衆生縁の篤かつた人で、有りとある人々の世話をせられた。この人の力で高等教育を受けられた人、——大學、高等學校、専門學校の教育を受けられた人が五十人以上もある。私が知つた時には、家に二十人からの學生が置いてあつて、それらの人の足袋の世話から仕て居られた。それで金があるかといふに無い。無い時は人から借りて來て、遣られたもので、六七十人を世話せられた中に、今日立派に大學、専門學校の業を卒へ、社會に立つて居られる人が三十人以上も出來てある。これ全く、奇特な志の致す處であるが、それで居て人に善く仕たといふ考

處がこの度びはその方が亡くなられたのであるが、それが發病は一昨年郷里に歸つて居られる時に、俄に腦溢血で倒られた。その時は然いふ病氣故、もう物が言へぬ。醫師が來て色々聞くが、物が言へぬ故手眞似て返事する。それは相場の手つきをせられたものだそうであるが、醫者の方はそれが分らぬ故、之はテツキリ腦が悪くなつたものと判断して仕まつた。此方は口が利けぬから仕方無く、之さへやれば分らうと一生懸命やるのが先方には通ぜず、現に『この分ては今夜が持つまい』と醫師が話して居るのが聞える。『それ聞いた時の自分の心持ちは、鐵か水の床の上に赤裸で座つて、ペタンと叩頭を仕てしまつたやうの心持ちで、冷いとも淋しいとも言うて見やうが無かつた』と話された。その時も私に來て呉れとの電報であつたが、その時は取消されて私は行かなかつた。幸にこの時は快くなられて歸京し、其後も續いて茲に聞きに來て、下され、現にこの前の日曜にも、茲に見えて居たのであつた。然ういふやうに法に志が篤く、殆どつかり詰

めに仕て居られた人故、常によく念佛を稱へて喜んで居られたのであつたが、聊か軽く受けて居られる嫌ひがあつたから、私は常にそれを誡めて居た。處がそれが彌々となつた時は、今斯く『唯淋しい、冷い、仕方の無いばかりであつた』とのことなのであつた。即ち斯く彌々其の期に及ぶと、唯仕方が無いばかりの其の者へ、佛よりの仰せが『汝一念正念にして直に來れ、我能く汝を護らん』——其の冷い、仕方の無い汝を哀はれみ、その汝を直に我能く護るぞ、何處迄も、その仕やうなきを見捨てぬぞ』の仰せが佛の大慈大悲でましますのである。

一三 『汝の言は行者なり』

殊にこの話にて『汝』との一言を疎そろかに聞いてならぬは、一度び然ういふ境涯に陥入つて、それから再び戻つて來られるといふことが有り得ぬことなのである。其の期に臨んで、も一度生き歸り、聞いて見度いと思つても、それが叶ふことと無い。其の儘ツツと逝つてしまふのを、それを遣つた者共が『よい往生だつた』とやうのことを言うて居るのである。故に清水氏のは、彌々その期に臨んだ時の心持ち——人間の死ぬ時は斯

んな氣持ちのするものぞこのことを言うて下されたものと思はせて貰ふのである。故に若しや信仰得ると、死ぬ時安らかな往生が出来るだらうなどい、少しでもそんな豫想が有つたりすると、その時『之ではいかぬ』と屹度思ひますぞ。それ程冷き仕やうの無き、其の者を佛よりの仰せには、

阿彌陀如來のおほせられけるやうは、未代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべしとおほせられたり。『御文』

全體『御文』のこの文は、善導大師の『汝一心正心』の文を翻譯されたのであるが——その冷き仕やうの無きを佛よりの仰せには、『汝一心正念にして云々』——『汝』とは其の期に及びて斯く仕やうの無き、その汝とである。それを『御文』には斯く『阿彌陀如來の仰せられけるやうは、……云々』『御文』に『我等』とあるは、自分の方から言ふから『我等』である。即ち『我等』は『汝』との一言が聞えた人間が言ふた處の言である。『未代の凡夫、罪業の我等たらん者』とは、その大悲の仰せが聞えた處の者が、その『我等』である。そこは聖人は

『愚禿鈔』の中に『汝』の言を

汝の言は行者なり。斯れを則ち必定の菩薩と名く。『汝！』との言が唯空に響いて居るのなら何にもならぬ。『君！』と言はるれば『ハイ』と答へる。『君！』の一言が通つた時には、『君とは私のことか』となると同じに、『汝！』との一言は、ハヤ既に然ら聲掛けられたる處の者が行者である。冷い鐵の床の上に、裸で座つた仕て見やう無い者に、『汝！寒からう、察したぞ。見捨てぬぞ！』その一言が聞えた時には、其のしやうの無い其の者が、ハヤ既に攝取心光中の行人である。故に『斯れを則ち必定の菩薩と名く。』蓮如上人の『御文』は、茲の此方に響いた處から書きになつてあるのである。

一四 蓮如上人の『頼鈔』の意義

こは一體『御文』は——今の『御文』は『疫癘の御文』の中にあるのであるが、——『疫癘の御文』は當時このごろ、このほかに疫癘としてひと死去す。これさらに疫癘によりて、はじめて死するにはあらず。生れはじめしよりして、さだまれる定業なり。さのみふかくちどろくまじきことなり。——

皆んなが『何て死んだか』とやうに思ふのであるが、それは定れる約束によりて死んだのである、疫癘の爲めに死んだので無い。——

——しかれどもいまの時分にあたりて死去するとき、さもありぬべきやうに、みなひとおもへり。これまことに道理ぞかし。——

併し然う思へるは無理無い、とあつて——このゆへに阿彌陀如來のおほせられけるやうは云々。

總て斯ういふ具合に蓮如上人の『御文』は至極簡潔明了なものである。併しこの『御文』なるものは、彌々信仰の徹底した心持ちでお書きになつてあるのだから、之を讀んで然ういふ風にならうとすると、なれぬのである。そこは一言して置か無くてはならぬ。

此間も子供を失はれた或方が、『御文』を讀んでも分からぬと言はれるから、何ういふ風に讀んで居らるかと思ふと、五帖目に

當流安心のをもむきをくはしくしらんとおもはんひとは、あながちに智慧才覺もいらす、たゞわが身はつみふかさあさましきものなりとおもひとりて、か

かる機までも、たすけたまへるほどは、阿彌陀如来ばかりなりとしりて、なにのやうもなく、ひとすぢに、この阿彌陀ほけの御前に、ひとすぢがりまいらするおもひをなして、後生たすけたまへとたのみまうせば云々。

『何うしても然ういふ風になれぬ』と言はる。それはそのなれぬのが我々の愚癡無智である。併し然ういふ風になることのやうに思はるゝは無理無い。今の『疫癘の御文』にしても『罪は如何程深くとも』までは分るも、『我を一心に頼まん衆生をば』とあるの故、頼むことのやうに思はるゝは無理がない。又現に頼むと書いてあり、『頼む』は入るのである。併しそれが此方から頼むとなると、然ういふ風に此方から色々思ひを運んですることが信仰となつて、變なことになる。爾らば頼まぬのか、それなら何うてもよしの空虚になる。こは何うかといふに、然ういふやうに頼む心も起らぬ、その仕方の無さを哀れみ、何處迄も捨てぬの大慈大悲を以て言うて下さる、その御眞實が聞えた時が
阿彌陀如来、我等が今度の一大事の後生、御たすけさふらへとたのみまうして候(改悔文)

ならぬ、そのして見やう無さを何處までも手を取つて下さる——聞なれば聞みなる程彌々『我能く』の廣大の御眞實に手を引かれて、其の者が參らせて貰ふ。其の何處迄もの御眞實一つが、彌々此方が聞みなるにつけ有難いと、斯ういふことになつて來るのである。

一五 臨終と平生

却説それは三年前に倒れられた時のことであつたが、其後清水氏は段々と茲へも單身で聴きに來て、喜んで居られたのであつたが、數日前説教場で説教聞いて居られる中に病氣再發して、終に昏睡に陥入れられたのであつた。私が見舞ひにゆくとき昏睡といふ話であつたのが、私と聞いて大聲擧げて泣き出された。其の時私は両面の感じを持つたのであつた。それは前の時に冷かと言はれたが、此の度びだて彌々可かぬとなれば、矢張り同じに冷いて有らう、との感を先づ持つたのである。去りながらその冷さを佛豫ねて知召し
死なんするやらんとこゝろぼそくおぼゆることも、
煩惱の所爲なり。(歎異鈔九章)

其の仕方の無さを『我能く汝を護らん』との御眞實を其後殊に聞かれて、其の御眞實一つが難有いと、両面の

の一念歸命である。故に歸命の一念は疑ひも無く我々の心に起つて來る。併しそれは初めからそれがあるのて無い。

そこは分りよく言ふと、我々の仕方の無さを見捨てざる眞實を持ちて、何處迄も見て下さる御眞實の故に、終に如何な不實の我々も、其の御眞實には敗けてしまつて、感泣せずにはをられぬやうにさせるまで、そこまで眞實にせずには措かぬとの御眞實を、斯ういふと分りよいのである。我々は冷かていかぬといふも、その爲め哀はれみ給はる大悲の眞實は、冷かなればなる程彌々察し、お見捨て無き御眞實なれば、如何に我々の不實も其の眞實には融かされ、一念歸命の心を生ずるまで、然うせしめずには止まぬといふ心なのである。故に頼むと言へば此方から頼む如きも、斯くの如く向ふより徹せしめ、感せしめ、頼ましめずば置かぬのお心故、終にそれが届いた時には『阿彌陀佛、後生助け給へ』の歸命の一念を發得すると、斯ういふことになるのである。處が兎角この徹底の一念を缺いたのが多くて可かぬのである。之を先きの清水氏の場合でいへば、其の冷かな、妻子財寶を捨て、行かねば

感を言はれたので有つたらうと思はして貰うたのであつた。こは人間この時程——妻子も財寶も、有らゆる人生々活を捨て、彌々といふ此の時程の時は無い。爾るにそれを我能く見捨てぬとの御眞實でましますこと。それに安心させて貰ふことが信仰問題の要である。他力に於て臨終を取り詰めよといふは、この時程人間善し惡しを離れた時は無い故、この時が最も味ひよいからである。今頃は永劫の眞實の世界に居て我々を觀そなはして居て下さるであらうと思ふ。四方八面多くの人と交りて、縁を結ばれた部面は各種各様であつた。それが金を貸さうが世話しやうが、大なり小なり、それを縁として佛法に引き入れられたことは、實に著しきものであつた。それが蠣殻町の米相場場に活動して居て、多くの縁に遇ひそれを行はれたのは、丁度維摩居士が多くに縁を結び、佛法の大海に引き入れられた様であらうと思ふ。當會館の地所の持主なる島田善根翁が、それであつた。清水翁が各方面に關係を持ちつゝ多くの人を導かれた一代の効蹟はまことに没す可らざるものである、と考へる。

斯くの如く『人生最終の歸結』は、この人生、唯この

恵みに安心させて貰ふ一つである。殊に斯く臨終を言ふと、臨終の爲めの信仰の如く聞えるも、眞宗に言ふ平生業成は、平日に於て然ういふ経験を爲し、平日に於て然ういふ恵みに安心して生活させて貰ふことである。すると平生「人が何う斯う」の問題の如きも、何れの行も及ばぬ愚かの私が、何處々々迄も「見捨て無き佛の御眞實」一つに助けられ参らせて往生を遂げるとなれ

ば、此の世に在りながら産業を行ふも、生活を営むも、皆なこの立場一つからさせて貰ふが信仰である。それは獵、すなごり、實業、政治、人事の交渉、それを我が力で爲るでは無きも、お見捨て無き大願業力に安心して、我が身の浅間しさを懺悔して、一日々々暮させて貰ふことである。之が人類最終の歸結であると考へるのである。(巳七)

眞佛顯現の本源

「眞佛土卷講話」

第一講

近 角 常 觀

一 「眞佛土卷」

今年度の講本は『教行信證』眞佛土卷である。

この『教行信證』は親鸞聖人が御自身の信仰を最も明確にも示しなつたがこの『教行信證』であるといつてよい。『教』とは本願の教が、『教』にして、『行』とはその

教は南無阿彌陀佛であるが、『行』である。その南無阿彌陀佛のお慈悲を頂いて信じたが『信』、それ頂けば證の境界に往かせて貰ふが『證』である。即ち「本願を信じ念佛をまうせば佛になる」『歎異鈔』が『教行信證』となるのである。

その『教』、『行』、『信』、『證』に就きては前九箇年に亘りて話したのであつたが、今年度の『眞佛土卷』はその教行

頂くとしては斯う頂いてよい。次に

本願の名號は正定業なり。

は『行』である。

至心信樂の願を因と爲す。

は『信』である。

等覺を成り大涅槃を證することは、必至滅度の願成就したまへるなり。

は『證』である。

如來世に出興したまふ所以は、唯彌陀の本願海を説かんとなり、五濁惡時の群生海、如來如實の言を信すべし。

またが『教』と、斯ういふ具合になりてある。即ち御同やうが頂く眞宗の佛の根本を示されたが『眞佛土』にして

それを『正信偈』では斯く初に説かれ、『教行信證』では一應濟んだあとで書きになつてあると頂いてよい。

或は前九ヶ年に亘りて拜讀した『教行信證』を、卷いて疊んで今一度頂くといつてもよいと思ふのである。

その『眞佛土』は眞實の佛、眞實の土であつて、之は『教行信證』ではこの次に來る『化身土』と對になつてあるのである。殊に親鸞聖人にあつては前より讀む如く

猶ほ分りよい爲め平日拜讀する『正信偈』て言ふならば

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。

と喚びあげ

法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在して、諸佛淨土の因……超日月光を放ちて塵刹を照すに、一切の群生光照を蒙る。

とあるまでが『眞佛土卷』に當るのである。これらは専門的に言へば色々にも言へやうけれども、先づ我々が

『顯淨土眞實教、行、信、證』と、類にこの顯淨土眞實といふことを仰せられ、聖人にしては『教行信證』にしても、斯く眞實なるものがあるから之を言はれるが基本となつて居るのである。而して其の眞實なるものは何處から來たか、斯く『顯淨土眞實教、行、信、證』となつて來なくてはならぬ根元は、この『眞佛土』の眞がもとなのである。言ひ換へれば淨土眞宗の眞宗となつて來ねばならぬ根本は、この『眞佛土』の眞にあるとなるのである。

その眞宗の根本を爲す『眞佛土』に對し『化身土』は、その眞の佛で無くして、行者の自力の計らひの加はつた信仰の狀が『化身土』である。故に法然上人が三百八十餘人の門弟中に於て、特に聖人が淨土眞宗を宣べられなければなら無つたは、この眞の佛を頂いたが眞宗にして、この眞の佛が頂けず、方便の假の信仰に停つて居るが『化身土』である。而してそれに停つて居られたが同じ法然上人の教を聞きながら、頂けなかつた他の弟子方の様であつたからとなる。するとこの『眞佛土卷』はこの點に於て極めて意味深き卷にて、故に拜讀すると眞の佛が救ひの姿を現はして我々を救うて

いふと、必ずしも形のある三十二相八十隨形好の佛を拜むのでも無く、又佛なることを高尚玄妙なる眞如實相の道理から言ふのでも無い。如來とは何かといふに、光明無量、壽命無量、之が佛の姿である、之を外にして佛の體は無いとなるのである。

之は蓮如上人『御一代開書』には、
他流には名號よりは繪像、繪像よりは木像と云なり。
他宗では名號よりも拜むに具合がよいから繪像、繪像よりは立體の木像といふのである。けれども

……當流には木像よりはえさう、繪像よりは名號といふなり。
眞宗では形ある木像よりは光明の書いてある繪像。繪像よりは文字丈けの名號の方が佛に近い。即ち南無阿彌陀佛の名號が最も適切とされて居るのである。即ちそのことは我々の心に形の拘束を離れた光明無量、壽命無量が眞佛の姿でましますからである。

これは今日の言葉に従へば或は光明無量は空間的、壽命無量は時間的といふことも出來やう。空間的に十方に遍滿してわたらざる無きが光明無量の狀、時間的に古今を通じて窮り無きが壽命無量の狀であるとも言

下さる、眞の御慈悲の様を頂くことが出来る。さりながら一面よりは又それだけ尊く嵩く、手を額にして太陽を仰ぐが如く、目映ゆいと云はんか、眩むと言はんか心も言葉も絶え果てた様がある。殊に『涅槃經』などを引きて、心も言葉も絶え果てた境地の様を縦横に説きになつてあるのである。

二 光明無量、壽命無量

先づ初に

『光明無量之願』

壽命無量之願

普通世間に行はれてある本では初に『顯淨土眞佛土文類五』と標題があつて、次に直ぐに之があるのであるけれども、御覽の如く坂東の御眞本では、斯く之が表紙裏に別記されてある。聖人はその眞の佛とは、如何なるが佛の姿か」とあつて、聖人は唯もう御一言！『光明無量之願、壽命無量之願』と、これだけ初めに擧げさせられてある。今更ならねども『正信偈』の初に歸命無量壽如來、南無不可思議光。

と、佛の光明無量壽命無量の姿をあげさせられてあると同じである。即ち淨土眞宗の阿彌陀如來は際立て、

へるのである。けれども唯自分と離れて空間的に大きな佛を想像したり、自分と離れて長き時間の佛を考へたて何もならぬ。光明無量は何の故か、我々が無明の闇に迷うて居る故それを哀みて照らして下さる處の光明である。光明無量——即ち無碍光如來とは何の意味か、我々が有碍の闇黒の人間故、その者を哀みて照らして下さるが無碍の光明である。『大經』の文には
無量壽佛の光明顯赫にして、十方諸佛の國土を照耀して、聞えざること無し。

處がこの十方無碍に極り無きを自分と離れて考へて行くと、不知不識他所に佛を眺めることになるのである。親、々と言ひても自分の親なることを忘れて、親は斯ういふものだと原則を何程聞いても何もならぬ。親は現に自分のことを心配して、呉れる慈悲であることが分りて、初めて分るのである。一般的に『親といふものは』といふこの考へ方が最も可かぬ。故に今も抑々眞實の佛なるものはと詮索すること無くして、現に我々一人々々が無明の闇黒に沈淪して居る、——これは『和讃』で讀むと聖人の心は一番頂き易い。阿彌陀佛のこのかたは、いまに十劫をへたまへり、

法身の光輪さほもなく、世の盲冥をてらすなり。

法然上人はこの『凡歷十劫』の文に及び、落涙潜々止めどが無つたと承はる。我々、現に闇黒に沈淪して居る御同やうが、この眞實の佛の顯現あるにあらずんば、何を以てかこの暗を破り、救ひを蒙ることが出来やう。實に世は冥てあり、我等は盲である。その盲、冥がこの恵み一つを聞くことにより、初めて光に遇ふことを得るのである。

三 佛は一佛なり

抑々この『和讃』は曇鸞大師が『大無量壽經』によりて作られた『讚阿彌陀佛偈』の御文その儘の翻譯であるが、斯く聖人は、自分の新しき語は一つもお用ひなさらぬ。今日は頻に創作々々と、新しく作り出すをよいとするのであるが、聖人の一面創作に見えて居て、親鸞聖人ほど文その儘を仰しやつてあるは無い。御經その儘を言はれてある。昔ながらの經文その儘を言うて居られるのである。この經文その儘であるのが有難い。日輪は昔ながらの日輪であるが、併し我々の一日一日はその日輪に照らされてゆけるのである。聖人は『和讃』を作られて色々のことを仰せられてあるが、それが

この外に如何なる經でも佛は無いとなるのである。而して『眞佛土卷』にはそれが出て居るのである。

壽命無量は今この光明無量と離して言ふには及ばぬも、御同やうこの人生の、生老病死ほど當てにならぬは無い。生あれば死があり、實に苦惱の人生である。親鸞聖人は、十九歳礙長の聖徳太子の廟嶺に詣うて、

汝の命根應に十餘歳なるべし。

の告を得て、それが御苦心の初めてあつたと承はる。曇鸞大師は病氣の爲に四論の研究を續けることが出来ぬ。先づ仙術を學びて健康を計らうとせられたのであるが、歸りに途に菩提流支三藏に遇つて淨土の教を聞き、長生不死の神法は之だと『觀無量壽經』を渡されるなり、斯くの如き無常を何處迄も哀れみ御見捨て無きが佛の御眞實であることが分つて、長生不死の神方は之だとお喜びになつたのである。故に聖人はそれを『信卷』に仰せられて

謹て往相廻向を按ずれば大信有り。大信心は則ち是れ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術云々。

これらから言つても壽命無量は、生老病死を哀れみて、其の者に壽命無量の廣大な境界を與へて下さる處の恵

一つとして變つたことは無い。變つたことと思はれるのまでが、皆な實は出所があるのである。そこが即ち彼の三國の祖師、おの／＼この一宗を興行す。所以愚梵勸るところ、更に私なし。(御傳鈔)

その精神で今の『和讃』は、即ちその如く『大無量壽經』に阿彌陀佛のことが書いてあるのであるが、併しそれは『大無量壽經』の佛で『法華經』となれば又別の佛があるのか、といふに、聖人にはそれが無い。苟も佛となれば佛は何處迄も一つの佛である。それが『華嚴經』であらうが『涅槃經』であらうが、佛となれば皆なそれは一阿彌陀佛のことである。故にそこは聖人は『諸經和讃』に言はれて

無明の大夜をあはれみて、法身の光輪さほもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する。

種々なる經典はあるが、それが『華嚴經』『涅槃經』如何なる御經であれ、佛とあれば一佛である。それは我々が無明の大夜に迷ひ無常の風にさそはれ、三毒の毒に酔はされ狂はされて居る様を哀みて、『法身の光輪さほもなく……安養界に影現する』極り無き盡十方無碍光佛として、その爲め顯現して下された阿彌陀佛である、

みてある。斯くの如き光明無量壽命無量の味ひを、この後『眞佛土卷』全體に涉りて仰しやつてあるのであるが、それは光、壽無量の本願がその根底となるの故、先づ初にその二願を擧げさせられたのである。之は『教行信證』では各卷とも、初に斯く皆な願があげてある。『行卷』には十七願、『信卷』には十八願、『證卷』には十一願と、斯ういふ風に今また『眞佛土卷』には斯く十二、十三願、次の化身土には十九二十の願と斯ういふ風になつてある。之はその何れもが一々廣大の佛願から來るの故、それを示してお出になるのである。

四 不可思議光如來

本文になりて、

『謹て眞佛土を按ずれば、佛は則ち是れ不可思議光如來なり。土は亦是れ無量光明土なり。』

謂はれば極りなきことなるも、今その眞佛、及び眞佛土をあぐれば佛は則ち是れ不可思議光如來、土は亦是れ無量光明土なり。『光明無量から來る佛名は、或は盡十方無碍光如來とも、又、不可思議光如來ともあるが茲には斯く『不可思議光如來』とあるのである。斯くいふと佛の姿はもう之で充分盡くされて居るのである

が、先さいふ如く、それは我々の暗黒をお見捨て無き光明のお姿なのだから、そのお心を我々自分の上に頂かねば何もならぬ。その不可思議光の味ひを自分を措きて言うて居るのは、所詮無いことになつてしまふのである。

不可思議光の味ひとは、平日用ゐる言葉にする時は佛意不思議といふことである。佛意不思議とは分りよく言ふ時は、思ひ懸け無いといふことなのである。

『斯ういふことが有らうとは思ひ懸けなかつた』といふのが、不可思議といふ味ひである。佛のお慈悲の不思議とは外で無い、我々罪惡の人間が、——この行き當りて仕やうの無つた人間が、廣大のお慈悲はその仕て見やう無きをお見捨て無いお眞實であつたことが分つた時には、之が不思議である。蓮如上人は法敬坊が字で書いた六字の名號が、火に焼けて六體の佛になつたのが不思議であると申上げた時に

それは不思議にてもなきなり。佛の佛に御なり候は、不思議にてもなく候。惡凡夫の彌陀をたのむ一念にて佛になるこそ不思議よと仰られ候なり。(御一代記 開書)

の動搖の有様などから考へても、これ程混亂暗黒の状態は無い。之が今後何うなると言ふたとして、それが言へる人あらば言ふの方が何うかして居る。見込みは立たぬといふのが本統である。仕方が無いといふ外ないのである。仕方が無いとなれば行き詰つてしまふのである。

處が不思議とは斯く私が仕方が無いに行き詰り、その仕方が無いに對して無量壽無量光の恵みは、如何にそこに困難あらんが、暗黒あらんがその仕方の無き限りそれを哀れみ捨てぬとお眞實であること、これが不思議である。故にこのことはこの不思議に夜が明けると明けぬとが、もうこの仕方の無いのが希望があるか否かといふことになるのである。これ程この恵みは如何なる失望にも力を得せしめ、蘇生らしめる恵みである。故に斯く私が仕方が無い限り見捨てざるお恵みであるといふこと、これが不思議の御哀れみである。故にそれが個人の場合であらうが、乃至社會、思想、或は信仰の問題からであらうが、斯く彌々行き詰まり仕やうが無いとなつたのが、この恵みを知らされ、精神的に立場が開けて來るは、この不思議の力である。

我々罪深く淺間しき人間が、その淺間しきを哀れみ何處々々までもお見捨て無いお慈悲に預ること、之ほどの不思議は無い。不可思議光とは、これが不可思議の光である。聖人が『眞佛土』『化身土』を書き分けて、『眞佛土』とは斯う、『化身土』とは斯うと示されたも、一言に言ふとこの佛意不思議に夜が明けたと明けざるである。明けたが『眞佛土』で、明けざるが『化身土』となる。窮極は茲になつて來るのである。

茲は殊に氣をつけて頂き度いは、今迄聞き慣れの側は佛意不思議など唯言葉で聞いて居る丈けて、慣れてしまつてちつとも不思議とは感じて居らぬ。言葉ばかり不思議で、實は悪い者が助るのが當り前だと思つて居る。珍らしき物を喰べつて珍らしく無くなつたと同じである。又青年者や一般常識で聞いて居る人は、『我々は罪が深いから可かぬ』或は『境遇が惡いから可かぬ』『斯ういふ人生だから可かぬ』と、茲を相對的に考へるばかり故、結局行き詰るより外なくなつて居るのである。それは人間、行爲の上からも然う充分にされるもので無く、亦元來そんなに當てに出來る人生でも無い。それは此頃の政治界、經濟界、又世界思想

然ういふ不思議のお慈悲が如來故『佛は則ち是れ不可思議光如來也』併し茲は不思議は佛の方に附く、頂く方に附くと誤解されてはならぬ。然ういふ不思議のお慈悲が佛故、これを聞かざるれば頂かすには居れぬとなるのである。

五 如何なるにも呆れぬものが御眞實

猶ほ斯ういふことは氣をつけるとよいのであるが、この『不可思議光佛』の御名にしても、不可思議光といふ名の出所はこの『眞佛土卷』今少し先きにいつた處に、『大經』の異譯『如來會』の文が引かれてある所に、佛の諸の異名が擧げてある中に在る。又ズツト後の所に、曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』文を引いてある中に、不可思議光といふ佛名がある。斯く、色々佛名がある中に、聖人が特に『如來會』『曇鸞大師』により不可思議光佛と標されたのは、斯く御同やうの罪深く淺間しきに呆れず、却つてそこに大悲を持ちてその者をこそ特に救ひ上げて下さる不可思議の光りの有り丈けが佛の全體故、特にこの文字を以て佛を表はして下されたのである。

さて斯ういふ不可思議のお光りてましますとのこと

が、之が皆様の心に何うなるか。中にはこの大慈悲と聞くなり、驚かんばかりに心の方向を轉換して、安んぜられた經驗を持つて居られる方も見受けするのであるが——即ちそれが不可思議光佛の御利益である。すると一方には『自分には然ういふ經驗が無いが、それでは自分には分らぬのか』との不審がある方もあらうと思ふのであるが、そういふ方は然ういふ分らぬ分曉漢故駄目なのかと思ふたら、佛の恵みは然ういふ分の悪い、鈍いのが可哀相故それに呆れぬとあるところが御不思議なのである。茲は不思議を此方の分る方には取らずに、此方は初めより分らぬ暗りの人間である。然にその者が斯くそれを哀はれみも見捨て無い慈悲に遇ふもの故、安んぜさせて貰はれるのである。爾に茲が『貴方も然ういふ結構な信仰を得たか、自分も一つ』となると、舌切雀の慾深か婆さんの如く、いつ迄も化けばかりが出て來るのである。否らすいつ迄も化けばかり出す此方に呆れず、その者を何處迄も見捨て給はぬが慈悲の御不思議である。一度びこのも眞實であることが知らされると、如何に暗黒であらうが、仕やうが無からうが、その限りも見捨て無い

のであるから、これ程心強いことは無い。爾るに『つぞや頂いたやうにあつたのは、あれは何うなつたか』などは、茲が確り聞けて居ぬからである。殊に今年は講本が長く、一々言うても居られぬから茲は確り氣をつけて置いて貰ひ度いのである。

六 無量光明土

次に『土は亦是れ無量光明土なり』——之はこの講本の二三枚行つた所に、『平等覺經』の文が引かれてある中に在る。佛の淨土も亦是れ無量光明土であるとすると、之は言ひやうによつては大分問題になる處がある。それは從來眞宗の者は何處に目を著けて居るかといふに淨土往生に目をつけて居る。從來眞宗の者は『お淨土參り』といふて、淨土往生を根本にして、言うて居るのである。また何程穢土の人生に執した處が、それがこの世で得られるもので無い。『大經』には一世勤苦すと雖須臾の間なり。後には無量壽佛の國は生じて快樂極り無し。とあつて、故に淨土參りと考へるは結構である。又淨土門として淨土往生に力を入れるは、固より無理は

無い。併し注意すべきは、從來他力の人が餘りに淨土參りに目を著ける結果が、死んでから淨土に參るのが眞宗の教の如くなつてしまつて、その爲め信仰がこの現實生活に於ては、實際心が言うてゐる通りになれて居ぬ人があらうといふ譯けてある。すると淨土參りといふことも甚だ不徹底なことになつて、それでは眞實の安心はされて居ぬと思ふのである。之は氣をつく可きは、もとより他力の教は淨土往生がもとである。聖人も既に顯淨土眞實教、行、信、證といはれてある。併しその淨土は淨土參りを先きにする、殊に眞宗に於ては、そういふ淨土を設けて待ち受け下されてある肝腎の心をおとしてしまふことになり易いのである。それは聖人は往生といふことを何處で言はれたかといふに、死にしまて言はれて無い、信の一念に仰しやつてある。即得往生は一念で言ふことになつてあるのである。然う言ふとそれは分り切つ

たことである、現に『口傳鈔』でも體失不體失往生といふことがあつて、法然上人の前で他の弟子方は、この身體が失くなりて往生と言はれたに對し、聖人は不體失往生であつて、この肉身を持ちながら一念に往生を得ると言はれたと書いてある。決つたこと何ても無いと思はるゝかも知れぬも、之が大問題である。何となればこの肉身を失はずして、現世生存を續けて居ながら信の一念に往生は決定するとの話である。それは成程眞の淨土は我々の生息するこの穢土では無からうが、併し往生が定つて彌々安心が得られるはこの土にありながら慈悲を頂いた一念であつて、往生淨土は死んだ時であるなどゝは、一言も書いて無い。死んだて初まる往生なら、一念に即得往生などは仰せられぬのである。然らば何によりて即得往生を現在に言はれるのであるか。目の著けどこがこの身が淨土に往くの、往かぬのと、そんな處にあるので無い。死んだら極樂に行かれると言ふたとて、第一行きやうも分ら仕無いのである。古人も往生淨土といへばとて、それはこの娑婆の虚妄の生れ方をするのかといふことが言うてあつて、

それは化生であるといふことが書いてある。すれば極樂に往くといふたどて、それはこの身が往くとて問題があるのて無い。彌々の肝腎はこの恵みを聞いて頂いた時が救はれた時で、その時を以て往生は定るのである。この慈悲に夜が明けるの一念を簡却する時は、淨土眞宗の味ひは無くなつてしまふ。故に聖人は現生に正定聚不退轉を仰せられた。そのやうなことは經文讀むも釋文讀むも、餘り明に書いて無いのを、聖人が厳しく現生に正定聚不退轉を仰しやつたは、現に苦惱の人生に於て、この恵みを聞く一念に大安心を得させて貰はれるからである。故に現生にこの慈悲頂いた時に往生は決定する。

すると極樂は何うかといふに、その恵みに夜が明けた上は、生命終れば自然に廣大のお力でその土に參らせて貰ふ。勿論それには違はぬが、併しその清らかな國へ往くといふことよりも、寧ろ肝腎は佛が既に不可思議光佛の故に、その佛土も亦無量光明土と。——無量光明土とは佛土もその不可思議の光明、慈悲の土のことである。すると佛と土とは違ふてないかと思はれる方も無いとも限らぬが、佛教に於ては正法の莊嚴、依法の莊嚴といふことがありて、——即ち『淨土論』

の衆生世間清淨、器世間清淨である——佛も慈悲なれば土も亦慈悲ばかりのお淨土である。即ち『眞佛土卷』は、この慈悲ばかりの眞佛土の恵みを知らせて下されるのが『眞佛土卷』である。(以下次巻)

病床感謝の御たより

謹啓。時下殘暑の候、益々御機嫌よく御座被遊候哉、御賢息様御病狀は、其後如何あらせられ候や御伺ひ申上候。今年は殊に御法縁厚く、夏季求道會に參會相叶ひ、眞佛土卷の講話を聴聞し、おぼろげながら私の行くべき境の、樂しき美はしき模様を目前に見申候心地致し、有り難き極に候。又今まで自力を偏執して動かざりし小妻も、二日目午後の御法話に、初めてへだて心と申すこと相分り、今までの自力の善の價値なき事相分り候と同時に、佛光まばゆきまでに照耀したまふ心地すると同時に、覺えず感謝の念佛わき出で申候ひし由にて、其夜下宿に歸りて後は、今までの自力をひるがへして、他力をたのみ奉る有様、小生にもありくと分り申候。翌朝御勤めに參會の節の如き、わけも分らずに感涙のうかぶを覺えざりし由、あれほど自力にかたまりし小妻まで、遂に慈光をかふむるに至り候事、感謝の言葉も無之候。

講習會修了後求道雜誌の御給物を忝うせし折は、御開山聖人が選擇集を書寫したまひし御事までしのばれて有り難き事言はん方なく、又々其上の慾望相わき、是非御寫眞一葉を頂戴仕り度き願望切實を極め申候。誠に鍍面皮の御願ひに候へども、一葉御下賜下され度く切望し奉り候。

歸國後御禮と御見まひと御願ひとをかね、御手紙差上ぐべきの處、突然急病に罹り、一醫は膽石病と申し、一醫は膽囊炎と申し、意見一致致さざりしも兎に角物も言へざる状態に陥りしため、甚だ延引失禮仕候。苦悶最も甚だしき最中には、耻しながら念佛も出で申さず、意識の上にとつと命長らゆるとも命をばらむとも、目に見えぬ親様は側につきそひ、離れたまはざる事のみ明に相分り、苦惱の法悦とても申すべき味をしみじみ味ひ申候。苦痛少しくやわらぎたる折には、小妻をして『歎異鈔』殊に第九章と第十四章とを拜讀せしめ、かほどまでのお慈悲なればこそ、私如きものも御救濟をかうむることよと感涙にむせび申候。『また病惱苦痛せめて、正念に任せずしてをばらんに念佛まうすことかたし。そのあひだのつみをば、いかゞして滅すべきや。つみさへざれば往生はかなふべからざるか。攝取不捨の願をたのみたてまつれば、いかなる不思議ありて罪業をおかし、念佛まうさずしてをばるとも、すみやかに往生をとぐべし。』

今度といふ今度は、此御文の有り難さ、心身にしみ渡り申候。今更慚愧の至りに候へども、此の御文と第九章の御文との味ひは、池山夫人御病中の事によせて、先生より度々承はり、有難き御文なることは承知致し居り候も、やはり心の底には、併しめつたに念佛申さずして命終ることもあるまじとの豫想ひらめき居り候ひしも、此度びの病氣にて如斯心の底のひらめきも、やはり自力をすてきざりしものなること相分り、その自力の價なく、たよりなき事、適切に相分り、多少にても自力の偏執の去らざりし事の面目なきまでには耻かしく、煩惱具足の凡夫と申す言葉の味ひが、一經驗毎に深く相分り、此度びの病氣にて、自力は全部無價値と相成り申候。自力の心をひるがへして他力をたのみ奉りながら、七年後の今日までも、多少ながら自力の心残り居り候ひし事、是も亦煩惱の所爲にこそと了解仕り候。命はやはり惜しさものにて、數日來快方に赴き醫師も大丈夫と申し、自身の全快に近きを自覺致し、家族と共に打よろこび居り候。中々苦惱の舊里は棄て難きものに候。御わらひ下され度候。御安心下され度候。先は御禮旁々如斯に御座候。敬白。

八月三十日

近角先生 膝下

酒見忠勢 代筆

大谷光演上人題字 (歎異鈔第二章の一節)
床掛用書撰紙半折寫眞平板印行

多田鼎先生序 (歎異鈔を繙くについて)
近角常觀先生跋 (歎異鈔の枝折)
六高教授池山榮吉先生謹述

意譯歎異鈔

歎異鈔宣傳の第一書

絶好の信仰讀本

歎異鈔の民衆化

本書は純眞なる信仰に生きた著者の切なる願求によりて聖人に奉仕する同朋同信の人々に捧げられた信界特異の書であります發行者は眞劍になつて本書の普及に努めて居ります

わかりやすい歎異鈔

四六判美装
正價金壹圓五拾錢
送料金拾

店 棚 賣
林 書 名 著 國 全

法語思想雜批
話語批語
雜評國語
實錄發售所
行發所

京都市下珠敷屋町

振替(大阪)一〇二九〇
東京四五九七〇

護法館

謹告

本誌時代の發行者として定価表の如く改定仕り候。甚だ不都合の發行にて誌代のみ改正候事申譯け。無く候へ共何卒御諒承願上候。最も之は今後御申込の方には實行するものにて、既に御預置の分に對しては今回はさかのぼらず候間左様御承知置き願上候勿々。

大正九年十月 求道發行所

近角常觀著 第十三版

信仰之餘瀝

改正定價六十錢 郵稅四錢
右本月中には出來の豫定

近角常觀著

親鸞聖人の信仰

改正定價壹圓 郵稅六錢
右は今回出來せり

求道發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

懺悔錄

十一版

定價卅錢 郵稅貳錢

本書には著者が人生の暗黒にぶつかつて苦しみましたことから實験から大慈悲の眞實に救はれ、方向一掃の信仰生活に出させられた。佛陀大悲の眞面目であることから、阿闍世王の煩悶得脱にあらはれた。残らず本書に盡くしてあります。著者が告白書として、著者の信仰を理解するには最も好適であります。

人生と信仰

八版

改正定價五十五錢 郵稅四錢

目次
第一章 人生問題と信仰
第二章 倫理力行と信仰
第三章 社會問題と信仰
第四章 世界宇宙と信仰
第五章 悲觀思想と信仰
第六章 犯罪心理と信仰
第七章 國家秩序と信仰

「人生と信仰」久しく品切でしたが、今回出來致しました。

求道發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

近角常觀著

慈光錄

再版

改正定價壹圓貳拾錢 郵稅四錢

●本書は「求道」第一卷及び第四卷に掲載せる著者が力作十一編を収録す。
●蓋し一念徹底の信源より顯現し來る實際生活の内面的風光を告白描寫せるものにして著者が筆になるものとしては、これ迄に表はれたる中の最も心力を傾注したる文字なり。
●親徳聖人眞筆聖德太子廿句偈文を原木大コロタイア版に附して別に巻頭に添付したり。

右品切中の處今回再版出來す

●集金郵便●

本所は「求道」前金預置讀者諸君に限り本所に於て發行の書籍は御便利集金郵便の御註文に應じます。その時は御一報下さらば、送本と同時に定價に規定の集金料を加へたる額を、直に集金便にて御請求致します。

東京市本郷區藤川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

大正九年十月二十日發行(毎月一回發行)

求道前號要目 (九年五月發行)

『歎異鈔』の技折

攝取不捨の意義……………近角常觀

超人生と即人生……………近角常觀

思想問題解決の焦點

●本誌は毎月一回發行とす●誌代は總て前金拂込のこと●送金は成るべく振替にやらせし●郵便爲替の組合には振替局は本郷區藤川町局宛のこと●郵券代用は二錢切手にて一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部卅錢(六冊分) 一圓七十錢(郵稅不要)

大正九年十月十七日印刷
大正九年十月二十日發行

發行所

求道發行所

電話(小石川一六四一番)振替(東京一六六九六番)

東京市本郷區藤川町一番地
編輯 近角常觀
印刷 佐藤駒次郎